メッセージ

4 イエスの救い（5）進歩への道「ささげること」
ゴットホルド・ベック

18 あなたを良いもので満たそう　窪内晃一郎

7人の証し

28 わがたましいよ。主をほめたたえよ　古江正枝

37 主のあわれみ、主の恵みに感謝して　内田万里子

46 主の御計画　太宰彰夫

54 私に平安を与えて下さる主　太宰宣枝

59 今の時の軽い患難（かんなん）は、
重い永遠の栄光をもたらす　田村啓太

71 主が私に成し遂げて下さったこと　内田好隆

77 私の時は御手（みて）の中にあります　内田雅子

イエスの救い（5）　進歩への道「ささげること」　ゴットホルド・ベック

しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。
（ローマ　6・22）

今回はローマ人への手紙6章6節および11節から23節までを、ご一緒に考えてみたいと思います。主題は進歩への道、すなわち「ささげること」です。

今まで考えてきた問いは、どうすれば、実際に主イエス様の似姿が私たちのうちに形造られてくるのか、どうすれば、実際に私たちのあこがれの勝利の生活に達することができるのか、また、どうすれば、私たちの信仰生活が前進するのかということでした。

これらの問いに対する答えは、一番目に「霊的に知ること」、二番目に「信仰の計算をすること」、この二つでした。

進歩への道　第一、第二段階

主イエス様は今から二千年前に私たちの身代わりとなり、私たちの古い人、古い性質とともに十字架で亡くなられ、墓に葬られ、新しい全人類とともによみがえらされました。私たちはこのすばらしい歴史的事実を、心の目で見て、真の知識として知らなければなりません。これが進歩する信仰生活の第一段階でした。

しかし、この第一段階でとどまっていてはいけません。二番目に、信仰の計算をすることにより、二千年前になされた歴史的事実を、自分個人のものとして受け取らなければいけない、ということも前回考えました。

主イエス様が亡くなられた時、私たちはイエス様のうちにありました。主イエス様がよみがえられた時、私たちはイエス様のうちにありました。主イエス様が天の御座に着かれた時、私たちはイエス様のうちにありました。これらの驚くべき事実が、信仰の計算によって自分のものとなる時初めて、私たちは主と同じ姿に変えられていき、勝利の生活を送ることができ、また信仰生活が徐々に前進するようになるのです。

いわゆる水の洗礼は、信仰によって体験したことを証しする式です。イエス様とともに死に、ともによみがえらされたという事実を心の目で見た人だけが、幸いな洗礼の式典にあずかることができるのです。歴史的救いの事実を啓示によって知り、信仰の計算により自分のものとした人は、このように洗礼を受けて証しをするようになるわけです。主を証しする者となるよう、主は私たちの成長を願っておられます。そして、それは私たちが自分を「ささげること」なくしてはあり得ません。

進歩への道　第三段階　「ささげること」

信仰の進歩のための第一段階は知ること、第二段階は計算することです。それに続いて第三段階は「ささげること」です。私たちは自分自身を「奴隷」として主である神にささげることが大切です。もし私たちが主の定められたゴールに達しようと思うなら、この第三段階も通らなければなりません。ローマ人への手紙6章12～13節には次のように書いてあります。

ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、

あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。（ローマ　6・12〜13）

この12節から6章の終わりまでの間に、最も多く出てくることばは「ささげる」ということばです。13節、16節、19節と合わせて五回、このことばがでてきます。見てみましょう。

あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。（ローマ　6・16）

あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。（ローマ　6・19）

多くの人々は、クリスチャンが聖められていくことについて話す時、よく「自分自身を神にささげなさい」と言いますが、いったい、何をささげるのか明確には言いません。私たちは何をささげるのか、はっきりさせたいと思います。

その前に、逆に、何をささげることができないのかと言えば、古い人、自分の知恵と力、生まれながらの能力と賜物は神にささげることができません。

主である神は古い人を呪い、十字架の上で判決を下し、裁かれました。古い人に属するものを、神は何一つ受け入れようとはなさいません。

では、何を私たちはささげることができるのでしょうか。13節に「死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」と書かれています。ここにその鍵があります。

私たちは、古い人ではなく、主とともに死に、ともによみがえらされた新しい人をささげなければなりません。

神に自らをささげるというのは、「古い人は主イエス様とともに十字架に死んで、すでにさばかれてしまっている」という信仰の計算をした結果、初めてなされるものです。この信仰の計算は、イエス様の救いの事実を知ることを土台としているのは言うまでもありません。はじめに知り、次に信仰の計算をすると、神は私たちに「自分自身を神にささげなさい」と言われます。

もし私たちが、自分の古い人は主とともに十字架で死んでいることを心の目で見て、知るならば、それを計算して自分のものとするのは当たり前のことです。

ですから、以前述べたように、ローマ人への手紙6章6節と11節とはいっしょに読むべきです。「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」（6節）、「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」（11節）と、みことばは語っています。

もし、私たちが自らが新しい人として主とともによみがえらされていることを心の目で見るならば、私たちがキリストにあって神に生きている者であることも、当然のこととして知ることができるはずです。

この二つの段階を自分のものとした人は、自然に第三の段階に導かれます。すなわち自分自身を「奴隷」として、神にささげるように導かれます。

人は、死からよみがえることがなければ、神にささげることはあり得ません。なぜなら神は、決して汚れた古い人を受け入れられないからです。私たちが自分自身を主なる神にささげるために準備となるその土台は「死んで、よみがえること」です。

イエスの救い（5）　進歩への道「ささげること」

ここから三つの問いを設けて、もう少し学んでいきたいと思います。第一番目は、「何をささげなければいけないのか」。答えは「私たち自身」です。第二番目は、「誰にささげなければいけないのか」。その答えは「主に」です。そして第三番目は、「どういう者としてささげるのか」。答えは「奴隷として」です。

その1　何をささげるのか

では、一番目から順に学んで行きましょう。私たちは何をささげなければいけないのでしょうか。

ローマ人への手紙6章13節と19節には、自分の肢体（したい）を「義の器」（道具）として、また「義の奴隷」として神にささげなさい、と書いてあります。主は私たちが肢体の全部をささげることを望んでおられます。自分はもう自分のものではなく、「主のものである」ということを知るのは、実に深い体験です。

例えば、五千円があなたのポケットにあるとします。それがあなたのものならば自由に使うことができますが、そうでないなら使えません。自分のものでないお金は自由に使えません。これと同じように、自分はもう自分のものではなく、主のものだ、ということをよくわきまえているなら、信仰生活は急速に前進することでしょう。

私たちは「死んで、よみがえることにより」、自分自身が主のものとなってしまったことを本当に知っているのでしょうか。私たちにあるすべてのものは、私たちのものではなく主のものです。

私たちの所有しているお金は自分のものではなく、主イエス様のものです。私たちが毎日過ごす時間も主のものです。私たちは時間を自分で計画して使うのでしょうか、それとも主の導きのままに用いるのでしょうか。私たちの時間は主のものです。また、あなたはいろいろな賜物や能力を持っていますが、誰がそれを自由に使うのでしょうか。あなたですか、それとも主でしょうか。お金を自分で分け与えたり、時間を自分の都合で使ったり、賜物を自分の考えで使うのでしょうか。それとも主が指図（さしず）して下さるように使うでしょうか。

私たちは、自分の金銭や時や賜物がすべて主のものであることを深くわきまえているでしょうか。

ある日、一人のクリスチャンが未信者の人と電車で向かい合って座りました。未信者の人は三人でした。しばらく行くうちに、未信者の三人は退屈してきて、「遊ぼう」と言い始めたのです。ところが遊びは四人でやる遊びです。三人は信者の兄弟に、「いっしょに遊ぼう」と言いました。

ところが信者の兄弟は、私には「手がありません」と言います。三人が驚いたような顔をして不思議がると、信者の兄弟は言いました。「私が持っているこの手、また私の持っているすべてのものは私のものではありません。私を救って下さったイエス様ものです」と説明しました。

イエスの救い（5）　進歩への道「ささげること」

愛するみなさん、これが主の聖さにあずかっている人の特徴です。みことばに、「今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」（19節）と書き記されています。

その2　誰にささげるのか

続いて第二番目の点、私たちは自分自身を誰にささげるのでしょうか。

13節に「あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」と書かれています。

多くの人々は、キリスト者が聖くされるのは、その人の内から悪いものが取り除かれることだと考えていますが、それは誤りです。聖さは、自分を全く主にゆだねることです。繰り返して言いますが、「聖さとは、自分を全く主にゆだねること」です。

旧約聖書を見ると、神はある人をご自分のものとして用いたいと思われた時、その人に油を注がれました。人々はその人が油注がれた時、聖くされたと認めたのです。なぜなら、油注がれた人はその時から主の指図に従う者となり、主のものとなるからです。

人間の場合だけではなく、小羊やまた金、銀も、油を注がれた時に聖いものとされました。小羊や金から、悪いものを取り除くなどということは考えられません。油注がれることにより主のものとなって、聖いものとされるのです。

「自分のすべてを主にささげます。私は全く主のお指図に従います」と心から言い表わすことが、真に聖くされることです。

ところで、自らを主にささげるためには、私たちはもうすでに自分が主のものとなっていることを知らなければなりません。主のものであるから、当然、持ち主である主にささげるのです。

主にささげるというのは、何かぼんやり漠然としたことではありません。はっきりとした体験です。私たちは、「私は自分のものではない。主のものである。だから、今日、今から、主にささげます」とはっきりした一つの線が引かれる日があったはずですし、また、そうでなければ、今後あるはずです。

多くのクリスチャンは、ささげるということを誤って考えています。ささげるということは神学校へ行ったり、宣教師、伝道師になることだと思っています。そして神学校を卒業して、意気揚々と、ご奉仕を始めるのはよいのですが、生まれつきの古い人のままで、ご奉仕をしようとします。これは決して主にささげることではありません。本当の献身ではないのです。

ささげるということは、いわゆる「ご奉仕」をすることでしょうか。決して、そうではありません。真の決心、真の献身は、「主の御心に自らをゆだね、主の望まれるままに事をなすこと」です。

ダビデ王は立派な家来たちを持っていました。しかしこの家来の中には門番もいたでしょうし、将軍もいたことでしょう。ダビデは自分の思いのままに、家来をそれぞれの務めに任命しました。

これと同じように、もし主がそうしなさいと言われ、それが主のみ旨ならば、私たちは門番にもならなければいけませんし、将軍にもなりましょう。

おわかりになったでしょう。大切なのは、主の御心です。私たちがあれやこれやと選ぶのはいけないことです。もし私たちが主のものなら、私たち一人ひとりに主のお定めになった道が備えられているはずです。

また一番大切なことは、「主」は私たちをどの道に導きたいのか、ということを自分自身が知り、主の求めておられる道を歩むことです。

「主よ。私は自分をあなたにささげます。あなたが求めておられる道を知り、その上を歩みたいです。それが私の唯一の願いです」と心から主に言い表せたら、それこそがまことの献身です。

イエスの救い（5）　進歩への道「ささげること」

私たちは生涯の終りに、「私は戦いを立派に戦い抜き、走るべき行程を走り尽くし、信仰を守り通した」と言えるようにしたいものです。

しかし、これと違い生涯の終わりに、「私は主の道を歩まなかった。小羊の行くところに従わなかった。私は自らの道を選んでしまった」と言わなければならないようなら、それこそ悲劇です。

私たちのいのちは一つしかありません。私たちが、この地上で生活できるのはただの一度だけです。もし、この生涯において、自らの道を、自分の意志で選びとるなら、主は決してご栄光をお受けになることができません。

「私は自分のために何にも欲しくありません。ただ主だけがみ栄を得て下さいますように」という立場を、その願いを、あこがれを絶えず持ち続けたいものです。

私たちは自らの願い、計画、目的を握っているのでしょうか。それとも主の御心をなすことが、自分のす

べてとなっているのでしょうか。神のみ旨はあなたにとって善であり、喜ばしいことであり、また、完全であるのでしょうか。

問題は、私たちの意志です。自らの意志を十字架に付けてしまい、そしてあますところなく、主にすべてをささげるかどうかが問題です。

仕立て屋さんに洋服を作ってもらう時、生地（きじ）を与えなければ洋服屋さんはどうすることもできません。家を建てる時、建築業者にお金を払わなければ、業者は材料を買えませんから、どうすることもできないでしょう。

それと同じように、もし主がご自分のいのちを私たちのうちに豊かに与え、ご自身の形を私たちのうちに形造ろうとされても、私たちが自分自身を主にささげなければ、どうすることもできないのです。あますところなく、全く主におささげしましょう。

その3　どういうものとしてささげるのか

最後に、第三番目の問いになりますが、私たちは自分自身をどういうものとして神におささげればよいのでしょうか。

みことばは、私たちが自分を「奴隷」としてささげるよう求めています。もし私たちが、自分自身をあますところなく、全く主にささげ、ゆだねるなら、いろいろな点で改めるべきことが起こってきます。職場の中で、家庭の中で、自分の私生活で変化が起こるはずです。考え方も変わってくるはずです。

なぜなら、主は私たち自らのうちから出るものをお喜びになりません。古い人のままでささげることをお嫌いになります。主は私たちの痛いところに手を置き、これはいけない、直さなければいけないとおっしゃいます。

また、あなたは、今まで自分がかけがえのないものとして大切にしてきたものを主におささげしているでしょうか。自分の好みを捨てて、主におささげしているのでしょうか。あの関係、この関係と主に喜ばれていない関係を、すっきりと絶ち切ろうとしているでしょうか。またこれから絶ち切ろうとしているのでしょうか。

主に逆らおうとするのは、もっとも愚かしいことです。あなたは、まだ主におささげしていないものを持ったままでいるのではないでしょうか。もし、すべてを主にささげたら平安がなくなるという思いから、そのことのために心を用いて祈ろうともしていないのではないでしょうか。もちろん、そのままの状態を続けることはできるでしょう。しかし、それは主の御心ではありません。主に逆らうのを止めて、自分の心に主をお迎えする場所を空け、主にすべてをおゆだねするなら、限りなく豊かなすばらしい祝福があなたに訪れることでしょう。

私は自分のものではなく、主のものであるということを知るのはすばらしいことです。地上で、これ以上偉大な喜びに満ちたすばらしいことはありません。

この真の知識を得て初めて、主が絶えずご臨在されるのを知ることができるのです。もし自分が完全に主に属する者であること知らないなら、主が常に自分のかたわらにおられることもわからないでしょう。

もし私たちが主にすべてをささげ、主の指図される通りにして自らを全くゆだね、主のご支配の下に入るなら、自分の興味を満足させようなどという考えはなくなります。ローマ人への手紙6章16節に、次のように書き記されています。

> あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。
>
> （ローマ　6・16）

ここに、しもべではなく「奴隷」ということばが使わ

イエスの救い（5）　進歩への道「ささげること」

れていますが、しもべと奴隷との間にはどんな違いがあるのでしょうか。

しもべは一人の主人に仕えて働きますが、自分自身が自分の主人であることには変わりがありません。自主性があります。ですからしもべは、もし主人が愛してくれなければ、こんなところはもうたくさんだと言って他の主人を選び、そこへ行って働くことができます。

これに対し、奴隷は主人に仕えるばかりではなく、奴隷自身が主人のものなのです。奴隷は自分自身のことを自分で決めることも、選ぶこともできません。自らは自分のものではなく主人のものだからです。

聖書は、救われたキリスト者は、例外なく主イエス様の奴隷であると言っています。主イエス様は、その尊い血潮で私たちを買い取って下さいました。

「主に買われた」という事実を知るなら、私たちはそのすべてを主にささげなければいけません。私たちは、自ら決定して、主の奴隷とならなければいけません。主は私たちに強制されません。強制されて奴隷になった奴隷を主はお喜びになりません。

今日のクリスチャン生活における多くの悩みは何でしょうか。

多くの信者は、「私は主のためにご奉仕します、私は主に自らをささげます」と言いますが、回心前の生まれながらのものをもって、そのように言っています。これはまことの献身とは言えません。まことの献身を聖書はどのように記しているでしょうか。

ヨハネの福音書6章に書き記されていますが、ガリラヤの湖畔で、主イエス様に自分の持っていたパンをささげた一人の少年がいました。ささげられたパンを、主はどうされたでしょうか。いくつにも裂かれました。主はそのように、ささげられたものを裂いておしまいになります。主はささげられたものを、御手の内に納め、砕き、全く粉々に砕かれます。しかし主はパンを裂いた後、それを祝福し、五千人の空腹を満たされました。

同じように、主にささげたものを主は砕かれますが、その後に祝福し、他の人の悩みを癒すために用いたまいます。

もし今日あなたが「主よ、すべてをおささげします」と言って自らをささげるなら、主は御手の内であなたを砕きます。

私たちは簡単に、またいたずらに「主におささげします。献身します」と言わないようにしましょう。主はあなたのその言葉をいたずらに受け取ることはなさいません。真面目に受け取ります。そのときあなたは砕かれ、自らの有り様を知り、失敗と弱さを悟り、失望し、主の導きを疑うようになるかも知れません。もしそのまま疑い続けたら、その最後はどのようなことになるのでしょうか。砕かれた器、役に立たない器がそこに残るだけです。他の人の悩みもあなたを通して癒されることはなく、主もあなたを祝福することができません。これはどういうわけでしょうか。

それは、あなたが主の御手の内で、全く砕かれ切ることを望んでいないからです。これは多くのクリスチャンの悲劇です。

奴隷として、私たちは自らを主にゆだねましょう。奴隷として、私たちは自らを主にゆだねなければいけません。奴隷は自分のすべてが主人のものであることを知っており、自分はどうなろうと、どうされようと主人の権利だということを認めています。

この態度をとることを主は待ち望んでおられます。もし、この態度をとるならば、それこそが真の献身です。

真の献身とは伝道者や宣教師になることではありません。自分の意志を主のご意志にゆだねることです。どこに行っても、時と所を限らず、会社でも、家庭でも、また海の上にいても、野原にいても、すべてを主にささげることです。

イエスの救い（5）　進歩への道「ささげること」

どこに主があなたを導かれようと、主の導かれるところはあなたにとって最上のところであるはずです。全く主にゆだね、小羊の行くところに従う人は、誤解と、悩みと、迫害の道を歩むようになるでしょう。しかし小羊に従う者は、やがて小羊のおられる栄光に満ちた天に導き入れられるのです。

愛する兄弟姉妹よ、私たちは全く主のものです。あますところなく主イエス様のものです。私たちの体、私たちの肢体全部が主のものです。

しかし、私たちが自分で事をなし、自分で事を決するなら、霊的な断絶、放蕩に陥ることになります。主の前では、いわゆる姦淫が悪いでしょうか、それとも霊的な姦淫の方が悪いのでしょうか。コリント人への手紙第一6章13節の後半をお読みいたします。

からだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためです。（1コリント　6・13）

最後に、同じく6章15節と19節、また20節を読んで終わりたいと思います。

あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。（1コリント　6・15、19～20）

本メッセージは、「ロバの子サーバー」のベック兄 暦年ファイルに録音されています。

次回掲載予定は、「イエスの救い（6）神の永遠からの予定」です。



あなたを良いもので満たそう

窪内 晃一郎

この地上に愛をもって人を形造られた方と、十字架の贖いによって私たちの罪を赦してくださった主イエス様は、「あなたの一生を良いもので満たそう」と聖書を通して語りかけてきます。

そのことばを耳にして、神様のお姿が目に見えなくても、声が直接聞けなくても、「あなたがほんとうにおられるなら、あなたのおことばどおりになりますように」と願う人には、必ず神は良いものを与えられます。

しかし、神などいないと言い、その存在とみこころを受け入れない、信じない者は神様から良いものを受け取ることができません。

私たちは何が良いことで、何が良くないかは、目先のことが中心で自分の価値観や都合でしか判断できません。けれども、主なる神は恵みとまことと先見に満ちておられ、人にとって何が良いものかを遠い先まで見通して、はっきりご存じであり、人に良いものを与えたいと考えておられます。

今から二千年ほど前に、ヨハネという人がイエス様を次のように書き記しました。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

（ヨハネ　1・1～4）

「ことば」とは神の御子イエス様をさしています。「わたしはある」と言われる父なる神とイエス様によって私たちに与えられた聖書には、「律法と十字架と御霊と信仰」について書き記されています。そこには神が人に与えられた最も良いものが満ちています。これを受け取るためにも、人の光であり、いのちに満ちた方のことばに耳を傾けていただければ幸いです。

●はじめに神様はこころの交わりを持って生きるように人を造られた

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は生きものとなった。

（創世記　2・7～8）

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。

（創世記　1・27）

神様が人をご自分と似た姿に造られました。そこには人が神様と親しい関係を保って、こころの交わりをとおし、さらに神様のことばによって喜びを持って生きるようにとの父なる神の願いと思いが込められています。

けれども人は、神に逆らうものの声に誘惑され、神との大事な約束を守れず、最初の罪を犯してしまいました。

このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。（創世記　3・7）

神様にこころを傾けて生きていた最初の人アダムとエバが、自分自身の姿に目を向けるようになり、それまで神様の声を第一とする者から、自分を第一とする、まず自分の目と心の声によってものごとを判断する者に、このときから変わってしまったといえます。

そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」

（創世記　3・8〜9）

神様は人が茂みに隠れていることをご存じでしたが、神様から身を隠したいと思った二人の心を見抜いて、あえて、あなたはどこにいるのかと呼びかけられました。その時、約束を破ってしまった二人は神様に対し、素直に「ごめんなさい」が言えませんでした。夫は妻のせいにし、妻は誘惑したもののせいにしました。

このことによって、人の内側には神に逆らうこころが芽生えました。そして、人はそむきの罪と、罪から来る死に支配されるようになったと書かれています。

罪を犯したとき、正しい方から隠れたい、逃れたいと思う気持ちは今の私たちも同じでしょう。

この時以来、神である主は、「あなたはどこにいるのか?」と、いつでも人に呼びかけられます。それは神と人との正しい良い関係を、私たちのほうから壊してしまった後でも、いつも人をこころにかけておられる主の呼びかけであります。

聖書の神は今の私たちにも同じように、「あなたはどこにいるのか?」と、神様からはぐれて、迷子になった私たちにいつでも呼びかけられます。神様の愛に満ちたまなざしは、いつでもどこでも、すべての人に向けられています。

●律法を通して神様のみこころを知ることができます

創世記では、その後人が地上に増えてきたとき、主は人を天からご覧になり、次のように言われました。

主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧なった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。

（創世記　6・5〜6）

主なる神は、人の心がいつも悪い方に傾くのを見て、人を創造されたことに深く心を痛められます。

このため、主は人が悪から善の道に立ち返ってほしいとの願いから、イスラエルの民を神の声に聞き従って歩む模範の民として、さらに神様のおこころを世界中の人たちに伝える人々として選び、モーセをとおして十の戒め、律法を与えられました。

この十戒は、出エジプト記20章1節から17節に書かれてありますが、1節から12節、13節から17節の二つに大きく分けることができます。

前半を要約すると次のようになります。

「わたしのほかに神はいない。だから、偶像を造り拝んではいけない。わたしだけに心を向けて、わたしを愛しなさい。みだりに主の御名を唱えてはいけない。あなたは安息日を聖なる日として主を礼拝しなさい。あなたの父母を敬いなさい」となります。

つまり、すべてに先んじて、いつも創造主なる神様に心を向け、その声に聞き従い、喜びと感謝の心をささげなさい。そして、父母を敬うことをとおして、私たちがまことの親である造り主に感謝し、神様を畏れ敬いなさいと言われます。

後半は次のようになります。

「殺すな。姦淫をするな。盗むな。あなたは隣人に対して、偽りを言うな。貪欲に欲しがるな」となります。これは人の心の内に、生まれる前から刻まれている罪の性質に対する神の戒めと言っていいでしょう。

しかし、私たちは誰ひとりとして、この戒めをすべて守ることができません。私たちの内側には罪をおかす要素として、神に逆らう心、神の御顔を避けようとする心、自分を第一としたいと願う心があるからです。

パウロは罪と律法の関係を次のように言い表わしました。

あなたを良いもので満たそう

私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。それは、戒めによって機会を捕えた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです。ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。（ローマ　7・9～12）

律法は私たちの罪を明らかにします。そして罪によって、いのちに導くはずのこの戒めが私を死に導くものであるとパウロは受け取りました。だから、私の罪を明らかにする律法は聖なる神のことばであり、正しく良いものだと述べています。

私たちは神の戒めをとおして、人間が罪深い者であることをはっきりと自覚するようになります。そして神のみこころから遠く離れた大変危機的な絶望の淵に立たされていることを知ることができます。それが自分自身の姿だと受け止めた時に、神様こんなどうしようもない私を哀れんでください、助けて導いてくださいと、祈り、願うようになります。

神はその叫びを聞かれた時、あなたを最善の方法で救うと言われます。

そのため、人を罪から救う方、神様の一人子イエス様を私たちのもとに送られました。

●イエス様の十字架は無償で人を罪と死から解放しました

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。（ピリピ　2・6～8）

二千年と少し前に神のひとり子、主イエス様が来られて、私たちの罪を贖うために十字架で私たちの代わりに罰を受けてくださいました。神である方が持てるすべての力と権威を捨て、人に仕える姿になることは到底考えられないことです。さらに造り主が造られたものののために、罰を代わりに受けられたことも私たちの常識では理解できません。

しかし、それは父なる神がわが子を犠牲にしてまでも、私たちを救おうとされた、大きな無償の愛から来ています。

私たちがこのことの意味と尊さをおぼえて、いかに大きな恵みを受けたかをひとりひとりが自覚し、主への感謝を決して忘れないでいると、そこに父なる神の深いおこころ、配慮があったことがわかります。

今、すべての人はイエス様の十字架の恵みの下にいます。ですから、時として律法を守れなくてもさばかれることは決してありません。主は私たちをさばくことよりも、イエス様の十字架をとおして、神様がどんなに私たちを愛しているかを知らせようとしておられます。

パウロは、イエス様の十字架を次のように受け取りました。

しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・19～20）

「私はイエス様とともに十字架につけられました」。このことばが頭で理解できなくても、イエス様の十字架の死と一緒に、罪ある私たちも十字架で死んでいる。つまり罪は赦されている。そしてキリストが私の内に生きておられるとは、何といのちと希望に満ちていることでしょうか。それを私たちはほんとうの恵みとし

あなたを良いもので満たそう

て、しかも代価を一切払うことなく、無償で受けました。ですから、神様は良いもので私たちを満たしたいと心から願っておられることがわかります。

●神の御子イエス様は約束の御霊を与えられます

十字架にかかられたイエス様は、一度死なれ、墓に入られましたが、再びよみがえられ、天に昇る前に約束のものを送りますと言われました。

わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊（みたま）です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。（ヨハネ　14・16～17）

イエス様の十字架のみわざが自分のためであったことを信じ、イエス様により頼んで歩む者には、約束の御霊様が私たちのうちに住んでくださいます。そして御霊様は主なる神とイエス様を証しし、私たちに進むべき道を指し示します。そして、主なる神の栄光が満ちることを待ち望みます。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

（ローマ　8・26～27）

御霊様をとおして、私たちはイエス様のみこころを知り、とりなしを受け、導かれます。御霊によって歩むことこそ、神のみこころに沿うことであります。はじめに人が造られた時のように、神様とこころでつながって、ともに歩むことと同じなのです。

●信仰は行いによらず神の約束を信じ、主にご信頼することです

かつてアブラハムは、まったく望み得ない状況下で神の約束をかたく信じました。神には約束されたことを必ず成就すると信じて待ち、そのとおりになったと聖書は語っています。それ故、アブラハムは神を信じきることによって、信仰によって義と見なされたと書かれています。義とは、神様からご覧になって正しいこと、良いことをいいます。

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。（ローマ　4・5）

私たちは律法を守りとおすことはできません。また、イエス様の救いのみわざに関しても、私たちの力や働きは何の役にも立ちません。ただイエス様を信じる信仰によって義とされる、よしとされる。これは不思議でありますが本当のことです。

この世で生きている私たちは、ついつい何かをする、代償を払う、修練を積む、修行をするなど、何かをすることによって良いものが得られると思いがちですが、神様の恵みはそのようなものでありません。神のみわざを心から信じ、心から感謝し、イエス様を愛し、ご信頼することによって義とされる、そしてイエス様の御霊によって歩むときに、律法の要求が私たちの内に全うされると聖書は言っています。

かつて、イスラエルの人々は自分の行ないによって律法を完全に守ることが神の義に至る道だと一生懸命になりましたが、神の義には到達できませんでした。なぜなら、それは信仰から出発したものではなく、人の行ないによって、持てる力によって義に至ろうとする道であり、それでは神の義に到達することは不可能だからです。神様のお力により頼むこと、信仰によらあなたを良いもので満たそう

なければ神の義に至ることはありません。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。（ヘブル　12・2）

イエス様は父なる神様へのまっすぐな信頼と、正しい行ないによって、十字架のみわざを成し遂げられ、神の右の座にいて、今も生きて私たちに目を注がれ、導いてくださっています。「あなたはどこにいるのか？」と、今も失われたたましいに対してそう呼びかけられ、私のもとに帰っておいで、あなたを良いもので満たしたいと願っておられます。昨日も今日も明日もイエス様は永遠に変わらないお方で、私たちひとりひとりに、良いものだけを与えたいと、聖書のみことばを通して、切に呼びかけておられます。

イエス様に心の目を向けて、「イエス様、いつも一緒にいてくださり、ありがとう。これから先もよろしくお願いします」と感謝しながら歩むことが大切です。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・10～11）

まだイエス様を知らない方、イエス様を信じるに至っていない方、神様の「あなたはどこにいるのか？」という呼びかけにどうぞ耳を傾けてください。

そして十字架で私たちの身代わりとなられたイエス様への感謝を、幼子のように、「イエス様、私のわがままをごめんなさい、そしてありがとう」と声に出して言ってみてください。かならずあなたを良いもので満たそうと言われる方の約束が本当であること、そして、「彼に信頼する者は、失望させられることがない」ことを知ることができます。

そして、イエス様に信頼する者は、天の御国への希望を持って、毎日を平安に歩むようになる。この真理を受け取っていただければ幸いです。

「あなたを良いもので満たそう」。それが、私たちを造られた方のおこころなのですから。

窪内 晃一郎（高知集会）





あなたを良いもので満たそう

わがたましいよ。主をほめたたえよ

古江 正枝



前列左から正枝さん、長女さん親子、弟さん夫婦。集会の皆さんと

私は、一九五六年神奈川県小田原市に生まれ育ちました。父、母、弟の四人家族で、両親に大切に育てられ、穏やかな子供時代を過ごしました。近くに教会はなく、聖書の話を聞いたこともありませんでしたが、神様の存在を漠然と感じていました。十代の多感な頃、人間は何のために生まれ、生きているのかと思うことがあり、また自分の性格に劣等感を抱いて、悩んでもいました。

高校卒業後、東京の短期大学に入学しました。ある時、同じクラスの同級生から小冊子を渡されました。そこには、聖書とイエス・キリストの救いについて書かれていました。

狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。（マタイ　7・13～14）

聖書は、天地万物の創造主、神様が人間に与えられたメッセージであり、すべての人が罪人であること、神の御子イエス・キリストを信じる信仰により、すべての罪が赦されることを知りました。二つの道を前にして、救われたいと願いましたが、偏見や迫害に対する恐れがあり、信仰は私にとって困難な道に思われました。決心できず迷う中、「恵みの時の今、信じなさい」とうながされ、神様に、将来の不安もすべてお任せしようと、信じる決心をしました。両親は、私の信仰に反対でしたが、高校生の弟は福音に耳を傾けて、その後、信仰に導かれました。

聖書を渡してくれた同級生は、群馬県内の牧師制度のないキリスト集会に集っていて、上京してから吉祥寺キリスト集会の日曜礼拝に集っていました。

他にも二人の同級生がイエス様を信じ救われて、ともに吉祥寺集会に集うようになりました。一九七五年、洗礼を、ベック宣教師より授けていただきました。

翌年、短大卒業後、就職して社会人になりました。クリスチャンとして、証しをしていかなくてはと気負っていましたが、いつしか周囲から浮き上がっていました。自分の性格に原因があるように思えて、自分の事ばかりに関心が向いていき、次第に神様に祈ることもしなくなりました。集会から足が遠のき、ついに離れることになりました。

その後、同じ会社に勤めていた主人と結婚しました。長女、長男と二人の子供も誕生して、幸福な生活に満足していました。夫の転勤後、静岡県藤枝市での生活が始まりました。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。
（エレミヤ　17・9）

結婚してから十年余り、聖書は実家に置いたままで、読むことはありませんでした。目に見える世界が魅力

的に見えて、愚かにも自分の足で歩み直してみようなどと考えていました。自己啓発、自己実現などの言葉が、世間でもてはやされていました。

やがて時が経過し、子育て、人間関係の失敗や種々の問題で、落ち込むようになりました。今まで神様に背を向けて、自分勝手に歩んできたことの罪深さに初めて向き合い、取り返しのつかないことになってしまったと、深く後悔するようになりました。

暗闇の中でもがいていた時、大阪キリスト集会に集う短大時代の友人が、思いがけず、新しい聖書を贈ってくれました。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

（イザヤ　1・18）

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

（イザヤ　53・5～6）

わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。

（イザヤ　44・22）

神様は、私のような罪深い者をも愛してくださるお方でした。悔い改めて、罪を赦され、心は平安と喜びで満たされていました。市内に教会が幾つかあり、これから集う教会への導きを祈りました。神様のみこころならば、どこでも良いと思っていました。しばらくして、市内に住むクリスチャンの方から電話をいただき、

ご自宅で開かれたばかりの家庭集会へのお誘いをいただきました。数か月後、吉祥寺より家庭集会にメッセージに来られたベックさんに、お会いしました。十数年ぶりの再会に、ベックさんは私の顔をすぐに思い出してくださり、「放蕩息子」の帰還をとても喜んでくださいました。元の居場所に帰ることが、神様のみこころでした。信仰から離れていた私のために、集会の方々が長い間祈ってくださっていました。そのことを知り、心から感謝しました。それから主人に信仰のことを伝えますと、少し不快感を示しましたが、集会に行くことを反対はしませんでした。むしろ前向きに変わった私に、安堵しているように見えました。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことが

7人の証し

Unser HERR lebt

あっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

（詩篇　23・1～4）

この頃、日本経済が失速、停滞し、社会全体を暗い影がおおい始めていました。私も前途に不安を感じていました。相変わらず小心者で、臆病な私にとって試練の時でしたが、イエス様を頼りに歩むことを教えていただいた恵みの時であったと、今振り返り思います。決して、自分の願った通りに現実は動きませんでしたが、神様の成してくださることが、私にとって最善であることを知りました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

二〇〇一年は、私たち家族にとって大きく変化の

あった年でした。長女が四月、大学に入学と同時に、高校時代の同級生と結婚入籍しました。そして八月には、小さな家族が、我が家の一員に加わることになりました。ここに至るまでの数か月間、神様は私たち家族を憐れんでくださり、次々と恵みのうちに導いてくださったことをお話します。

その年の初め、主人に読んでほしいと願い、聖書の小冊子を食卓に置いていました。手に取ったのは主人ではなく、一人不安に押しつぶされそうになっていた長女でした。聖書のみことばが、娘の心のうちに働いてくださり、勝利を与えてくださっていました。大学センター試験の一週間前、予期せぬ事を打ち明けられ、驚きましたが、心の中で「イエス様、このことだったのですね」と静かに受けとめていました。少し前から、娘の身に、わからない何かが起こりそうな予感がして、心が騒いでいたのです。その場で娘と二人、イエス様に向かって「どうか助け導いてください」と祈りました。その夜は眠れず、強い緊張感の中にありました。一方で、「光のうちに出された」ことを感じていました。「なんて幸いなことだろう」と感謝の思いが、心のうちから湧き上がっていました。

時を移さず、家庭集会があり、主人が初めて出席しました。ベック兄が、悄然としている主人を慰めてくださり、二人が結婚することが良い、と勧めてくださいました。その後、結婚の方向に話が速やかに進んでいきました。親族の皆さんが結婚に賛成してくださり、娘たち二人を応援してくださいました。話し合いの末、二人は学生結婚することになり、推薦入学が決まっていた県外の大学と県内の大学にそれぞれ進学し、卒業後に一緒に暮らすことが決まりました。

三月末に、高知市で、高知喜びの集いがありました。この時、結婚の報告のため、高知県香北町の主人の父と兄の元を、娘と二人で訪ねることにしました。義父は、肺気腫を患い、その頃、うつ症状に悩んでいると聞いていました。主人が心配して「お父さん、ベックさんという方に会って、お話を聞いたら、きっと元気になりますよ」と電話で励ましていました。日曜礼拝の当日、参加するつもりのなかった義父の気が急に変わり、何かの力に運ばれるようにして会場に導かれました。集会の後、ベックさんが、義父と家族数名の席で、神様の愛と救いについて話してくださいました。最後のお祈りに、「アーメン」と父が続けて言いました。父の様子が、一変して明るく笑顔になり、そのあと終始、うれしそうに見えました。

八月、長女たち夫婦に、元気な女の子が誕生しました。赤ちゃんがその場にいるだけで、家族が笑顔になり、皆の心が癒されているのがわかりました。この年の十月、義父が召されました。高知喜びの集いから半年後のことでした。

それから三年後の二〇〇四年、主の恵みは続きます。小田原の実家の母が、脳梗塞を発症して九死に一生を得ました。後遺症を抱えた母を、父が献身的に支える生活が、この頃から始まりました。この母の病をきっかけに、集会から遠ざかっていた弟が、再び導かれ、横浜集会に集うようになりました。

二〇一二年、父が八十七歳、母が八十一歳となり、いよいよ自宅での生活をあきらめることになり、市内の老人ホームに夫婦一緒に入所しました。

十一月、ベックさんが家庭集会の後、両親の部屋を訪ねてくださいました。父母の願いがあってのことでした。集会の皆さんも加わり、父母を囲んで、イエス様のお話を聞く時をいただきました。

最後に、こうお祈りしました。

「愛する主イエス様
私のわがままのために、代わりに罰せられ死なれたことを感謝いたします。
あなたの流された血によって、すべてのあやまちが

7人の証し

Unser HERR lebt

赦され忘れられていることも感謝いたします。
あなたを信じますから、死んでさばかれることがないことも感謝いたします。
あなたを信ずる者は、死んでも生きると約束されていることも感謝いたします。
死ぬことは終わりではありません。あなたと一緒になることです。
私の国籍は天にありますから感謝いたします。
今からのことすべて、あなたにおまかせいたします。
あなたの御名によってお祈りいたします。
アーメン。」

四か月後の二〇一三年三月、母が召されました。聖書にもとづいた葬儀を、キリスト集会で執り行っていただきました。母を亡くして父のことが心配でしたが、天国の約束に父は慰められていました。また、葬儀を通して、天国へのおもいが参列者の方々に与えられたことも感謝でした。

母を見送った後、健康であった父が、間質性肺炎を患ってから弱っていきました。入院中、医師から、看取りの段階と告げられました。食事ができず、経管栄養の点滴を継続することになりました。この時、私自身、目前に手術を控え、主治医から手術日の決定を迫られていました。先が見えず、不安でした。手術が成功して、病院の父の顔を見ることが出来た時には、うれしくて心から感謝しました。多くの集会の方々が祈り支えてくださいました。また病院にお見舞いに来てくださり、父のためにお祈りしてくださったことも感謝しています。父は入院中、医師、看護師さんたちの好意により、CDラジカセで音楽を聴かせていただいていました。枕元で賛美歌を聴くことが、父の唯一の楽しみになっていました。二〇一五年九月、九十歳で父が召されました。

父母のために長い間、横浜集会、静岡集会の方々が、祈り支えてくださいました。心から感謝しております。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

私の生来の罪の性質は変わらず、イエス様を見ずに自分を見てしまうと罪責感に今も心が沈みます。以前、こんな私が本当に救われているのかと、救いの確信が揺らぐことがありました。今は、イエス様の新しいいのちのうちに生かされている自分がいて、イエス様が私の喜びであり、希望となりました。

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

（詩篇　51・17）

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

（1ペテロ　1・8）

現在、娘夫婦は、四人の子供に恵まれ、六人家族になりました。我が家の近所に住んでいます。そして日曜日には、娘と孫たちと一緒に、礼拝に集う恵みをいただいています。夫と長男、長女の夫も、まだ救われていませんが、家族の救いは神様の約束ですから、信じてその日を待ち望んでいます。

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

7人の証し

Unser HERR lebt

（ヨハネ　15・12）

私たちが集っている静岡集会では、毎週、日曜礼拝が、掛川市内の集会所で行われています。日曜日には、西は浜松市から、東は静岡市以東の広い範囲より、イエス様を慕う兄弟姉妹たちが集まって来ます。大人は三十名程ですが、乳幼児から十代までの子供が多く、子供集会では、元気な子供たちの賛美の声が響きます。神様からいただいた祝福と恵みの数々に感謝して、主の御名をほめたたえます。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

（ピリピ　3・20）

古江 正枝（ふるえ まさえ）

一九五六年生まれ、神奈川県小田原市出身、市立鴨宮中学校、県立小田原城内高等学校、実践女子短期大学卒業

夫　健二（けんじ）

長女　植松 美穂（うえまつ みほ）

長男　健彦（たけひこ）

主のあわれみ、主の恵みに感謝して

内田 万里子



ご主人の隆さんと

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。

（詩篇　16・11）

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。

（詩篇　119・130）

結婚して数年たったある日のこと、主人の母、内田愛子姉妹が聖書をプレゼントしてくれました。「詩篇には宝のようなみことばがいっぱいよ～」と教えてくれたように思います。初めて自分の聖書を手にしたとき、とてもうれしくてパラパラと開きましたが、どこから読んでいけばよいのかわかりません。何もわからないけれど確かなものが欲しいと願っていたときの新しい第一歩でした。

主に導かれるまで　そして　主の憐れみ

私は一九五四年、北海道釧路市に生まれました。三

歳下の弟がいます。父方の祖父母と同居で、明治生まれの厳しい祖母に母はとても苦労した、と言っていました。私たち子供にやさしい父と教育熱心な母は喧嘩が多く、子供心に「なぜこんなに言い争うのかしら?」と思っていました。次第に嫁姑の問題とわかってきました。

高校二年になる時、父の転勤で家族四人東京に引っ越しました。高校の卒業式の日、戦争でご主人を亡くされた担任の先生が最後のホームルームで「あなた方はまだ若いからわからないと思うけれど、人生にはいろいろなことがあります。信仰を持ちなさい」と話されました。「信仰とは何なのだろう?」と漠然と思い始めていました。

二十代も半ばになる頃、母は私にとりえがないことを心配し、「若いうちに結婚して!」とよく言っていました。学生時代の友人から結婚式の二次会にだけ招待されたことがあり、そこで出会った主人と結婚に導かれました。

息子が生まれ、家の近くの幼稚園に入れました。そこにはカナダからの宣教師ご一家のお子さんも通っていました。その母親のマリオンが英会話を教えてくれるというので、私は数人のグループに参加しました。

ある時、マリオンが急に痩せてしまったように見えました。今日、体調が悪いので検査に行くとのこと。そのすぐ後、彼女はガンのため、余命六か月との宣告を受けたと聞き、まだ若く幼いふたりの子の母親である彼女のことを思うと、とても信じられませんでした。すぐにマリオンは治療のためカナダへ帰国することになり、幼稚園の人たちにメッセージテープを残してくれました。「私は死ぬのは怖くありません。イエス様のところへ行くのですから。子供たちのことは少し心残りですが、そのこともイエス様にお任せします」というものでした。この言葉を聞き、死ぬことが怖かった私は涙が溢れ止まらず、「頼るのはここしかない、イエス様というお方だけ」と、真剣にイエス様を知りたいと思うようになりました。マリオンは半年後、天に召されました。

同じ頃、私の母がガンかもしれない、グレーゾーンだと言われ入院しました。息子が幼かったためなかなか見舞いにも行けず、息子の通う幼稚園の教会に日曜日に行きたい、神さまに「母を助けて下さい」と祈りたいと思いました。それまで、祖母の厳しさに苦労した母の悲しみや孤独を思いやることもない冷たい私でした。「今、母が死ぬのはあまりにかわいそう、どうぞ助けて下さい!」と心から願いました。

このような者の願いに主は深く憐れんでくださり母は無事退院、心から感謝しました。その幼稚園の教会の牧師さんは那珂湊でベックさんから洗礼を受けたこと、ベックさんを尊敬していることを後になって懐かしそうに話してくださいました。その時はまだ、義母が吉祥寺キリスト集会に集っていることを知りませんでした。

ある日、義母から、吉祥寺キリスト集会というところがあり、所沢でも集まりがあるから「行ってみない?」と誘われ、聖書をプレゼントしてくれました。そこで初めてベックさんとのお交わりが与えられ、「三位一体のことを知っていますか?」と聞かれ「父と子と…」と答えようとしましたが、その次が出てきません。「聖霊だよ」とやさしく教えてくださいました。初めてお聞きしたベックさんのメッセージは難しくて何も覚えていません。人から「良い人」と思われたい、努力が大切、「自己実現」という基準で生きていた私は聖書に書かれていることを頭で理解しようとしても全くわかりませんでした。それでも、「また行きたい」という気持ちだけが与えられました。

続いて義母は、また突然、「吉祥寺集会で洗礼を受けない?」と言ってくれました。「もっとイエス様に近づきたい」との思いだけで、一九八八年一二月のクリス

7人の証し

Unser HERR lebt

マスに受洗の恵みにあずかりました。イエス様が私の罪のためにつけられた十字架の意味やイエス様の復活のこともわからない者でありましたが、一方的な主の憐れみと恵みの時でした。

この時ベックさんは、「これからは夫、隆の救いのために祈りなさい」とおっしゃいました。でも、なぜ隆さんのために私が祈るのかがわかりませんでした。感謝もなければ家族の救いのお約束も真剣に受け取ることなく、自己中心の傲慢な者でした。ベックさんはすべて見抜いておられたと思うと本当に恥ずかしくなりました。主はこのような者をも見捨てず忍耐をもって導き続けてくださいました。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。（哀歌　3・22）

しかし　あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――（エペソ　2・4～5）

それからは春日部、浦和の集会に導かれ、主人の両親といっしょに主人が毎週礼拝へと運んでくれました。しかし私は人とのお付き合いが苦手で大勢集まる集会の中では孤独になり、逃げ出したいほどでした。自分のことを正直に言うことができません。実は人を恐れ、光の中で自分の罪が明るみに出されるのを恐れ、そしてイエス様の十字架が見えていませんでした。主を信じ切っていないこと、罪を赦していただいたという確信と感謝がないことが明らかでした。しかしその時の私にはわかりませんでした。兄弟姉妹とのお交わりは主とのお交わりであることを知るまでに時間がかかりました。

もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。（1ヨハネ　1・7）

そのような中、ひとりでいる私に声をかけ、つかず離れず、悩んでいる時も元気な時もふさわしいみことばで励まし支えて下さる姉妹を主が備えてくださいました。心の中で信仰の大先輩と呼ぶこの姉妹とお交わりいただき、ともに主にあって大喜びする恵みを今も頂いています。

東北、秋田での主の恵み

やがて、主人は仕事でカナダに出張することが多くなるにつれ、海外に移住したいという思いが強くなっていました。人生は一度しかないからと、定年より早く退社し、カナダへの移住を実現すべく、家財道具を処分し、冬の寒いカルガリー移住を決行したのが二〇〇八年の秋、主人は五十代半ばでした。しかし私が少し遅れてカナダに到着した頃、主人には秋田での仕事の話があったとのこと。私はそれも知らず、春が来るのを楽しみにしていました。冬の終わりに突然、主人は「秋田に仕事があるから行こう」と言いました。

あれだけ望んでいた海外生活をやめ日本に戻る、という主人の選択と決心をよく理解できませんでした。若い頃、私は納得のいかないことに「どうして？　なぜ？」と問い続けるので、主人は「それは質問でなくて詰問されているみたい」と言いました。理屈を通そうとする自分でした。しかし今回は何だかよくわからないけれど「従うだけ」と思い、瞬く間に日本に帰国。旅行でも訪れたことのない、親しい友人のいない秋田での生活が二〇〇九年春に始まりました。

あわただしく不安を感じる間もありませんでしたが、姉妹方から頂いたみことば、「安心して行きなさい。」

(ルカ7・50)に励まされました。「安心して行くとよいのだ、主が言っておられるから」と幾度も思い、背後でのお祈りに心から感謝しました。

秋田から一番近い集会は岩手県盛岡でした。北上でも開かれる家庭集会に集えることは本当にうれしく、東北のご兄姉方とのお交わりが与えられ、なつかしいふるさとに帰って来たような喜びを頂きました。

東北にメッセンジャーとして来られている兄弟が大館でもメッセージを語ってくださり、間もなく「秋田でも家庭集会をしても良いですか?」と尋ねられました。引っ越したばかりでしたので「声を掛ける人がいませんが…」と申しました。「ひとりでも聞いてくれる人がいるなら行きます」、と兄弟は言われます。交通費も、時間もかかり犠牲を払って来てくださるご兄姉のすべてを主にささげ、みことばを語り続けてくださる姿に目が覚める思いと、感謝でいっぱいになりました。

秋田に礼拝が導かれたのはある日突然でした。盛岡の兄弟から電話があり、「礼拝メッセージ当番表に『秋田』と書いてあるけれど、ベックさんから連絡が来た?」と聞かれ、「いいえ、ありませんけれど」、と答えました。あと二、三日で日曜日です。その後、すぐにメッセンジャーの兄弟から電話があり、やはり「秋田」とのこと。「まずは月に二回、三か月ほど、主人も承諾するのであれば始めましょう」と言うことで秋田での礼拝が始まりました。主人は、私が喜ぶならば、と承諾したのかもしれません。二〇一四年四月のことです。何の説明もなく一方的な主の憐れみと恵みを頂いて始まりました。

長い間「僕はアッシー」と言い続けた主人も、秋田で礼拝が始まってからは、メッセージの録音係をし、賛美し、兄姉方との楽しいお交わりの中にいます。これまで多くのご兄姉方のお祈りにより支えられ導かれてきたことを心から感謝しました。この時から主人は聖餐にもあずかるようになりました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2・8）

主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。（哀歌　3・25）

ひとり、ふたりと主は不思議なかたちで兄弟、姉妹を呼んでくださいました。以前は春日部におられ故郷の秋田県に戻って来られた姉妹は「イエス様から逃げ隠れしていたつもりでも逃げおおせることはなく、主イエス様はちゃんと見つけ出してくださるのね」と言ってくださいました。今はご主人も一緒に集っています。

またインターネットを通して主人の妹夫婦がトロントから、また横手市に住む姉妹の妹さんがワシントンから参加され、顔を合わせて礼拝できるのは大きな喜びであり、力が与えられます。

これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。（詩篇　118・23）

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をひとつにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。（マタイ　18・19）

小さな群れの秋田集会、この地で一人でも失われたましいが救われますように、と主イエス様に祈り、集うことができる恵みに心から感謝しています。

現実を見ると、日本海側の冬は天候が荒れることが多く、遠くから礼拝に集われる兄姉にとって簡単なことではありません。小さなことで思い煩い、サタンの攻撃で押しつぶされそうになることもあります。その

7人の証し

ような時、ベック兄が「『悩みながら喜ぶ』だよ。みんな悩まないと祈らないでしょ?」とおっしゃっていたのを思い出します。「ぜ〜んぶ主イエス様のせいだよ」、また「へりくだっていればOK!」と語ってくださったことが思い出され、感謝します。

秋田に来てから早十二年、この間に主人の両親と私の母が天に召されました。何度も秋田と埼玉を往復しながら、「主が『日本に戻りなさい』と導いてくださったのだ」と思うことがよくありました。多くのご兄姉方のお祈りとご奉仕に支えられ主人の両親の葬儀もすべて吉祥寺と春日部、浦和の集会の皆さんが執り行ってくださいました。「主にある家族」の意味をみことばからも、またご兄姉方の主のご愛にあふれるご奉仕からも味わい知る時でした。主の憐れみと恵みは言葉には尽くせぬ大きさです。

私の母は所沢の集会に幾度か導かれ、ベック兄の

メッセージをお聞きする恵みにあずかりました。始めは本当に頑なでしたが段々弱められ「ありがとう、ありがとう」と言い、「今が一番幸せ」とよく言っていました。父が亡くなってから一〇年になる二〇一六年三月、簡単と言われていた手術の数時間後に召されました。弟は母の予期せぬ死に号泣し葬儀も仏式で家族葬にしたいと家族親戚だけの小さなお別れとなりました。正直なところ、このことが御心かどうかわからず、「これからは弟の救いを祈ること、そのためのことなのでしょうか」と主にお尋ねする日々でした。ベック兄に撮っていただいた母と私の写真には「私たちの国籍は天にあります。」(ピリピ3・20)のみことばが書かれています。このみことばを握りしめ天国での再会を楽しみに祈っています。

私たち夫婦のひとり息子は富山で結婚に導かれ、志津香さんと孫の紗愛と暮らしています。昔はイエス様大好きな息子でありましたが今は離れています。家族

の救いのお約束を信じ、ともに主イエス様を見上げ賛美して大喜びできる時を楽しみに祈り続けております。

小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。
(ルカ　12・32)

神を愛する人々、すなわちご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私は知っています。(ローマ　8・28)

イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。
(ヘブル　13・8)

7人の証し

Unser HERR lebt

内田 万里子（うちだ まりこ）
一九五四年北海道釧路市生まれ、都立武蔵高校卒、津田塾大学英文科卒

夫　隆（たかし）
長男　薫（かおる）

主の御計画

太宰 彰夫



奥様の宣枝さんと

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

私は、一九五六年一月に岡山県児島市（現在の倉敷市児島）で、二人兄弟の次男として生まれました。両親、祖父母、兄、叔母、の七人家族で家には神棚と仏壇があり、毎朝祖母は神棚に手を合わせていました。私の幼い頃は親戚をはじめ、父の友人知人、また母が洋裁を教えていたので五～六人の生徒さん、そして時には叔母の同級生が十人程遊びに来るという大変多くの人が集まる家でした。このことは私たち兄弟にも受け継がれ、幼い頃から色々な人を見て育ちました。

聖書との出合い

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられることがわかります。　（1ヨハネ　4・10～13）

一九八五年七月十四日、児島聖約キリスト教会にて婚約式の時に聖書と共に頂いたみことばです。妻の宣枝から結婚の条件として言われたのが、教会で結婚式をあげることでした。元来、私は無宗教、無信仰でしたので何の問題もありませんでした。まだ確信をもって信じるにいたっていない私に対して、牧師は、私のために教会にて数回にわたり、キリスト教の説明、キリスト者との結婚の心がまえ、信仰についてなど、熱心に話してくださいました。また私の両親に対しても、教会で話をしてくださいました。そのとき教会に何の違和感もなく行けたことも、教会での結婚式に対して両親をはじめ、親族の誰一人反対する人がいなかったことも、今考えてみると、すべては私が救われるための主の御計画であったと思われます。

私たちは一九八五年十二月八日に結婚式を挙げました。その後、妻は仕事の都合で月に一、二度しか教会に行けない状態でした。たまに、私も誘われて行くこともありましたが、私はいつもお客様でした。

7人の証し

キリスト集会との出合い

教会へ行けなくなっていた妻は、いつの間にかキリスト集会に集うようになっていました。ある日、バイブルキャンプに行かないかと、誘いがありました。場所は長野県軽井沢。私は独身の時、テントを持って毎年夏休みに、乗鞍岳、白樺湖と長野県へキャンプに行っていたものですから、どこかなつかしく、運転手として行くことになりました。

そのバイブルキャンプは、一九九二年五月の西軽井沢国際福音センターの献堂式の時のことでした。三歳と、一歳前の二人の息子と四人家族で軽四自動車で、山陽道も長野道という高速道路もない時代に車中泊をして行きました。予定では妻と次男を福音センターに残して、私と長男は軽井沢で遊ぶつもりでした。ところがセンターを出て長男と二人で軽井沢へ向かう途中、国道十八号線は大渋滞、軽井沢へ行くことを諦めて引き返し、福音センターで集会に参加することになりました。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ。――（イザヤ　55・8）

この頃、岡山でも家庭集会が始まり、夜の集会なので、私も運転手として参加するようになりました。妻は坂出集会の礼拝に集っていましたが、私は日曜日には、若い頃からしていたソフトボールの練習、試合へと行っていました。そのうち練習は早朝だったので、時には私も礼拝に参加するようになりました。また、各地の喜びの集いへも導かれるようになりました。

洗礼へ

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

一九九二年九月、神戸喜びの集いにてベックさんのお話を聞く時が与えられました。三日間のうち、後半の二日間に参加しました。人数も少なくなった三日目の朝、朝食前に長男と二人でいた時、ベックさんが、何の前ぶれもなく、近くに来られ、「朝食後にお話をしませんか?」と声をかけられました。ベックさんと話をされたい方が多い中、朝食後礼拝が始まるまで、一時間程の長い時間、ベックさんのお話を聞くだけで、私は何一つ質問出来ませんでした。まるで、猫に小判、糠に釘。覚えているのは、三位一体のこと、イエス様を信じる者は、罪を赦され、永遠のいのちを与えられるということ。「イエス様に、素直に『ごめんなさい、ありがとうございます』と言えば救われて天国に行けます。今でなくてもいいよ。いつでもいいよ」。そして最後に、ベックさんの後に続いてお祈りをしました。

死後の世界は私にはわからない事と、わからないから考えない事にしていました。それが、天国の希望が見えたのです。そこで私は計画を立てました。私は太宰家に養子に入っていました。両親には、太宰家を守らなければならないと言う古い考えがあります。生きている間は両親に従い、人生の終わりに「イエス様ごめんなさい」と言って天国へ行く計画でした。でも、それは許されるものではありませんでした。

一九九二年十一月二十一日から二十三日までの三日間に行われた高知喜びの集いでの事でした。二人の息子、両親と六人で前半の二日間参加しました。

帰る日の朝、坂出集会の方から洗礼を受けないかと言われました。洗礼は、二十三日に予定されていたのですが、私たちと同じように二日で帰られる方が洗礼を受けたいと言う事で一日繰り上げて洗礼式が行われ

信仰と祈り

どうか、恵みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。（ローマ　15・13）

聖書を開くことも少なく、祈ることもできない私が自分を罪人と認め、イエス様の十字架のみわざを信じ、信仰への道を歩み始めたのは、奇跡としか言いようがありません。集会の皆さんの祈りに支えられたことだと思いました。

祈りを体感した私ですが、自分からはなかなか祈ることができませんでした。祈り会では祈る事ができても、礼拝では祈ることができませんでした。なぜなら、祈り会の祈りは個人的な祈りで、家族や友人などの救いのための祈りであり、自分の思いわずらいを素直に祈れました。それに対して礼拝の祈りは、男性の信者る事になったそうです。集会の方との会話の中で何かこだわりがあるのではないかと指摘されました。それは両親へのこだわりであったと思われます。

イエス様は、私が洗礼を受けるのに最良の時を与えてくださいました。今回の喜びの集いには、両親が参加している事により、洗礼の証しを見てもらえるから、自分の言葉で無理に伝える必要はない。私の思いではなく、すべて主イエス様がととのえてくださり洗礼を受けることとなりました。岡山から来ていた四人の方々も、一緒に洗礼を受けました。一九九二年十一月二十二日、高知喜びの集い（海風荘）でのことでした。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。（伝道者　3・1）

に与えられた特権であり、聖書を拝読し、イエス様が私たちの罪のために十字架についてくださり、罪の赦しを与えてくださったことへの感謝と、イエス様の栄光と誉を讃えるための祈りであり、個人的な祈りではないと言う思いが、私にプレッシャーを与えていたからです。

そして洗礼を受けてから一年二か月後の一九九四年一月二日に初めて礼拝で祈ることができました。その後、喜びの集いでベックさんにお会いできた時に礼拝で祈ることができた喜びを伝えると、ベックさんは、「よかったね彰夫、りっぱな祈りはいらないよ。自分の思いを素直に祈ればいいよ」と言って下さいました。

私はイエス様に祈るのではなく、人に聞かせる祈りをしようとしていたことに気づかされました。それが一年以上祈れなかった原因でした。

祈りとは、自分の思いを素直に祈ること、結果を求めず、すべてをゆだねる事により、楽に祈れるようになりました。すべてはイエス様が判断してくださいます。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。（1ヨハネ　5・14）

このような未熟な信仰ですが、イエス様を伝えたいと思って救われた喜び、罪の赦しを多くの人に話しました。でも多くの人は、良い話しをありがとう。でも私には必要ありませんと言われました。仕事も当時忙しく、仕事が偶像となり、会社ではイエス様の事を忘れていました。週末の家庭集会と日曜日の礼拝に参加するだけの「サンデークリスチャン」となっていきました。

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。（2テモテ　4・2）

7人の証し

Unser HERR lebt

そんな頃、一九九六年に我が家でも家庭集会が開かれることになり、イエス様を伝える場として用いられることになりました。家庭集会には、両親をはじめまだ信じるにいたっておられない方も集われ、夜遅くまで語らいの時をもつことができ、私も救われた喜びを再確認し、イエス様を中心として共に集まることの大切さを学ぶことができました。

その後、母は救われ、二〇一七年に洗礼を受け、父も病床の中で救われました。すべてはイエス様のなされたことで私の力は不要でした。二〇二〇年一月に父は天に召され、自宅での前夜式と集会での葬儀になりました。父は、自分の言葉でイエス様を伝えることはできませんでしたが、イエス様は、前夜式と葬儀を通してイエス様を伝える時を与えてくださいました。前夜式の時に、我が家で家庭集会をしていることを紹介すると、「参加してみたい」と言われた方もおられました。

私は、救われた者にはイエス様を伝える義務があると思っていましたが、父の前夜式と葬儀を通して、義務という律法に縛られていたことに気づかされました。聖書のみことばを伝えるだけで、他の飾り付けのようなものは必要ないことを学びました。現在は、まだイエス様を受け入れていない二人の息子の救いを祈る日々です。

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い（あがない）、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであって、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。このキリストにあって、私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従って、このようにあらかじめ定められていたのです。

（エペソ　1・7〜11）

7人の証し

Unser HERR lebt

太宰 彰夫（だざい あきお）
一九五六年一月　岡山県倉敷市児島生まれ、倉敷市立味野（あじの）小学校、味野中学校、岡山県立水島工業高校機械科卒業、サノヤス造船株式会社水島製造所 勤務

妻　宣枝（のぶえ）
長男　啓介（けいすけ）
次男　敏雄（としお）
母　八重子（やえこ）



私に平安を与えて下さる主

太宰 宣枝



一番左が宣枝さん、お母様の八重子さん(右から２人目)

イエス様との出会い

私は両親と三姉妹の五人家族で、末っ子。幼い頃は人前に出る事が苦手で、わがままで自分の思うようにならないと腹を立てて、物をこわしてしまうような子供でした。時には、こんな自分を好きになれなくて、後悔する者でした。

中学二年生の時に、長姉に誘われ、初めて近くの教会に行き、今までに味わったことのない心が落ち着く経験をしました。そのうちに「聖書には、誰からも聞いたことがない愛のことが書かれている。誰からも聞けないことを、もっと知りたい」と思い、通うようになりました。母は、長姉に「妹まで連れていかないで」と教会に行くことを反対していました。

高校受験で志望校に落ちて、すべり止めの私立高校へ通うようになった私は、目的が見いだせず、徐々に精神的に落ち込むようになりました。母親から言われる励ましの言葉も、苦しみに変わり、親にも理解してもらえないと思い、辛かったです。

同じクラスで前の席の生徒が声をかけてくれ、話をするようになり、また交換日記を勧められて書くようになりました。その頃かかえていた心の暗闇、死にたいとの思いまで書いていました。自分では、どうすることもできません。が、彼女のことを信頼できる友人だと思うようになっていました。

それから夏休みになると、友人の家から近い日生(ひなせ)の教会に誘われて行きました。また温かい御家族との出会いも本当に有難(ありがた)かったです。高校時代に神様を信じている二人の友人に出会っていました。

教会での伝道集会で掲げられているみことばに目を留め、この時に神様を「信じたい」と心の中で思い、十九歳の時に滴礼(てきれい)での洗礼を受けました。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。　（２コリント　５・17）

集会に導かれる

二十五歳の時に地元の教会で結婚式を挙げました。その時、夫はまだ信じていなかったのですが、牧師に結婚する事を報告すると、「イエス様を信じている人を結婚相手に捜すから、一週間待ってください」と言われ、ただ違和感だけを覚えました。

結婚前に何度か教会に行った夫からは、「もう二度と教会には行きたくない」と言われてしまいました。その後、私も教会で長男の祝福式を受けてからは足が遠ざかっていました。どうしたら良いのかわからないままでいる私に、夫から「気の向かない所は行かなくてもいい」と言われ、夫に従ってみることにしました。

教会に行かなくなって三年が過ぎました。

一九九一年の秋に、周りの方々が、十人位でキリスト集会の軽井沢バイブルキャンプへ行かれ、喜びの表

情で「そこはオアシスのようだったよ」と帰ってこられた時の言葉に、私はおののいていました。その理由は、以前教会での特別伝道集会がきっかけとなり、キリスト集会の証し集『光よあれ』(第四、五集)を注文したことがあったのです。その時、癌の方の証しを読んで、「癌末期でもこの様な笑顔でいきいきと生きることが出来るのですか。私もこの様になりたい」と思っていたからです。

一九九二年四月五日にキリスト集会の高知喜びの集いで浸礼にて洗礼の証しにあずかりました。前日にある方が浸礼を勧めてくださった時、「聖書に書かれている洗礼は浸礼のことだよ」と教えてくださいました。私は「本当に浸礼が必要なのか?」と、はじめは自分の思いで反発していたのですが、なぜか一瞬で受けたいという気持ちに変わり、浸礼による洗礼を受けることができました。

夫も同年十一月二十二日に浸礼にて洗礼の証しに与りました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

(使徒　16・31)

幼馴染との再会

幼馴染のYさんとの再会が思いがけないところから与えられました。同級生で集まっての日帰り旅行に、Yさんが誘ってくださるのですが、お断りばかりしていた私は、礼拝に行っていることを伝えました。Yさんからは、思いもよらず「もともと、人生に迷っている。生きる意味がわからない。誰でも救われるの?」という返事が返ってきて会話が始まり、家庭集会に来られるようになりました。一か月後の岡山喜びの集いに参加され、洗礼の証しをされました。その後毎週、礼拝に集われるようになりました。

Yさんは、糖尿病が悪化して腎臓の人工透析、視野に障害、手指の切断のため入退院を繰り返していました。「あと五年は生きたい。もう聖書の文字は見えない」と叫びに似た願いを語られました。メールでは、意地悪な質問をして来られましたが、ある時を境に一変したのです。お祈りも「イエス様、先のことよろしくお願いします」に変えられ、集会の皆さんとのお交わりも喜ばれるようになっていたのです。

Yさんは、二〇一七年に天国に召されました。Yさんは、三年間の信仰生活を走り抜けたと信じています。天国でのYさんとの再会を思い、イエス様に心から感謝致します。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

(ヨハネ　6・37)

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。

(エレミヤ　29・11～12)

この方(主イエス様)以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

(使徒　4・12)

両親の救い

父親が救われたのは、頸髄狭窄症で十年間寝たきり状態となり、誤嚥性肺炎で入退院を繰り返していた時のことです。私が、聖書の「伝道者の書」を読んでから、父に「神様を信じているの?」と尋ねると、「信じているよ」と返事がありました。飛び上がるほどの喜びで

した。両親とは同居していて、いつでも聞くことが出来たことだと思いますが、この時に質問しようとの思いを起こしてくださった主イエス様にただ感謝しかありません。父は、二〇二〇年一月二十日に天国へ召されました。集会で葬儀をさせて頂けたことは、本当に有難く、心からうれしく思います。

母親は、長い間、イエス様を信じる事を拒否していました。家の中では戦いでした。しかし、家庭集会のお交わりの時に決心し、洗礼に導かれました。イエス様、ありがとうございます。

あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。（イザヤ　46・4）

私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してありません。これからも、あらゆる恵みに満ちた主イエス様がしてくださる事を期待し、出会った方々の救いを祈りつつ、歩みたいと思っています。

渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。（黙示録　22・17）

太宰 宣枝（だざい のぶえ）
一九六〇年五月　岡山県倉敷市生まれ、児島小学校、児島中学校、岡山就実高校、倉敷看護専修学校、岡山済生会看護専門学校卒
夫　彰夫（あきお）
長男　啓介（けいすけ）
次男　敏雄（としお）
母　八重子（やえこ）

今の時の軽い患難は、重い永遠の栄光をもたらす

田村 啓太



左から二番目が啓太さん。妹の絵里さん、ご両親と

イエス様との最初の出会い

子供の頃の思い出で最も強く印象に残っているのは、父の仕事の関係で小学校の後半を過ごしたタイ・バンコクでの生活です。当時のタイは、政情も不安定で、経済的にも貧しく、街なかには至る所に物乞いの人がいました。毎日、子供らしく明るく元気に遊び回っていましたが、このような現地の光景は子供時代の原風景となりました。

そして、ちょうどこのときにイエス様との最初の出会いがありました。現地に日本人によるプロテスタント系の教会があり、母に連れられて、私も妹と一緒にそこの日曜学校に参加していたのです。イエス様の紙芝居を見たり、牧師さんの話を聞いたりしながら、神様はいる、それはイエス様だということを、子供なりに信じるようになりました。そのため、毎晩寝る前にはイエス様に祈るようになりました。

中学に上がると同時に日本に帰国しましたが、そこ

から問題がいくつか出てきました。一つは、帰国子女によくある問題かもしれませんが、学校にうまく適応できなかったことです。そして、もう一つの問題は、もともと厳しかった父から叱責される機会が増えたことです。そういうわけで、私は学校でも家でも身の置き場がないような状況になりました。寝る前には、これらの問題をイエス様に祈りの中で訴えていましたが、状況は好転せず、「肝心なときに助けてくれない」というひねくれた思いが生じ、いつの間にか祈るのをやめてしまいました。

高校、大学と進学し、学校での問題は解決しましたが、父との関係は年々悪化していきました。そんなある日、父との信頼関係が完全に崩れてしまう出来事が起き、父と縁を切る形で家を出ることになりました。親子というのは、本来なら自然に信頼関係が保てるはずですが、その信頼関係が完全に切れたことは、やはりショックでした。その後しばらくして、母と妹も家を出て、一家はバラバラになりました。

この世での彷徨

家を出て、大学生活を送っていた一九八〇年代後半はバブルの全盛期でした。世の中の景気がよく、アルバイトをすると大卒初任給くらいのお金を稼げたこともあり、毎晩のようにお酒を飲み歩いて、好き放題の生活をしていました。就職も売り手市場のピークで、大した苦労もせずに内定をいただき、一般の企業に就職しました。営業職だったので、ここでも接待でお客さんと毎晩のようにお酒を飲み歩いていました。そんな入社三年目のある日、カンボジアで国際支援の仕事の募集をしているという求人広告を目にしました。

東南アジアで子供時代を過ごした私は、社会人になってからも、心のどこかで途上国のようなところで、人の役に立つ仕事がしたいという思いがありました。そのため、この求人広告を見たとき一瞬で心を奪われ、

当時勤めていた会社には迷惑をかけてしまいましたが、三か月後には現地に飛んでいました。カンボジアでの仕事は、国連カンボジア暫定統治機構という国連ＰＫＯ（平和維持活動）の選挙部門の仕事でした。当時のカンボジアは、内戦の影響で国の統治機能や社会制度が崩壊していたため、国連がその統治機能を肩代わりしながら、民意を反映させるための制憲議会を立ち上げる選挙の準備に着手していました。私は、カンボジア南部の地方で一年ほど、その選挙の準備と運営の仕事に携わりました。

その後、南アフリカでも同様の仕事に関わり、国連の仕事を一生の仕事にしたいと思い、周囲の勧めもあり、いったん米国の大学院に留学しました。そして、このときに不思議な出会いがありました。留学開始直後の一九九四年秋に、集会のニューヨーク喜びの集いがあり、そこに既に集会に集っていた母と妹が渡米して参加したため、私も喜びの集いの会場に行くことになりました。そこで集会の責任者を務められていたゴットホルド・ベック宣教師とお会いしたのです。

正直なところ、当時私は「キリスト教」というものにへき易していました。大学院では、当時、宗教戦争のような様相を呈していたボスニア紛争のことをテーマの一つとして勉強していたのですが、そこではいわゆるキリスト教徒と呼ばれる一派が言語を絶する行為に手を染めており、キリスト教だけは勘弁してほしいという気持ちがあったのです。

そんな状況でベックさんとお会いしたのですが、ベックさんは私に会うなり、「ボクはキリスト教が大嫌い。キリスト教には絶対に入ってはいけないよ」ということを真顔で言われました。また、「イエス・キリストは、キリスト教と何の関係もありません」とニコニコしながら言い切りました。後で分かったことですが、神であるイエス様は、人間を造った方ですが、人間が作ったキリスト教とは確かに何の関係もありません

でした。しかし、当時の私にはこの根本的な違いがよく分かっていませんでした。

ともかく、このときのベックさんの印象は強烈で、全身から力と光を放っているように見え、握手が力強く、何か本当に困ったことが起きたら、この人のところに行こうと、表現は変ですが、「駆け込み寺」のような位置づけで、その存在が頭に刻み付けられました。ベックさんの背後に、イエス様がいたことは後から分かったことでした。

救い

米国では、希望通りに国連に関する勉強をさせてもらえたこともあり、寝食を惜しんで勉強にのめり込んでいきました。しかし、日々課される課題の量が尋常でなく、自分の能力不足もあり、一週間のうち半分は徹夜といった無理な生活を送るようになりました。その中で徐々に疲れがたまり、自殺願望のような鬱症状が出てくるようになりました。卒業後、いったん日本の国際支援団体で働いていましたが、そこでも鬱症状に悩まされ、毎日を青息吐息で過ごしていました。

そんなある日、以前に申し込んでいた新しい国連の仕事のオファーが急に舞い込んできました。実はこの頃には、すでに鬱症状が進み、新しい環境で新たな仕事をする気力などは残っていませんでしたが、この絶好のチャンスを諦めることができず、無理を押して欧州での赴任前研修に参加しました。しかし、その途中で精神状態が悪くなり、受け入れ先には大変な迷惑をかけてしまいましたが、謝り倒して仕事を辞退させていただくことをお願いし、逃げるようにして帰国しました。

あとに残ったのは、この無責任な行動と、自分のキャリアが終わったことについて、どう後始末を付けるかということでした。しかし、そうしたことを実行する勇気もなく、逡巡していたところ、ふと思い出されたのが、「何か本当に困ったことが起きたら、この人のところに行こう」と駆け込み寺のような位置づけで記憶していたベックさんのことでした。

数年ぶりにベックさんにお会いし、全ての話を終えると、ベックさんは最後に聖書のみことばを書いた一枚の色紙を私にくださいました。そのみことばは、そのときの私の心境にぴったりと当てはまり、水が砂に吸われるように心に染み渡りました。

> 主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。
> （詩篇　34・18）

その後、私は段階的にゆっくりと救いへと導かれていきました。この頃、私は神様の存在を信じていなかったので、まず神様が本当にいるのかが気になりました。子供の頃は信じていたのですが、それが記憶の彼方に消え去っていたのです。そうした中で、聖書を読んでいると、神様が存在すると認めざるを得ない一節に出会いました。

> この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。
> （使徒　17・24～25）

神様の存在を確信するようになった私は、次に、どうしたら実際に神様に助けてもらえるかということを、必死に考えるようになりました。そんなときに目に留まったのが、次のみことばでした。

> しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがっ

7人の証し

て、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・24～25）

こちらから近づけば、神様であるイエス様も近づいて来て、私のことを「完全に救う」と言ってくださっていることは、新鮮な驚きであり、とても勇気づけられました。そして、この「救う」ということが、単に苦しみから救い出してくれるという次元を超えて、私を罪から贖い出してくださるという意味だということが徐々に分かってきました。

そのため、この頃には自分の罪の問題が意識されるようになりました。もともと私は、途上国の人の役に立ちたいという思いで、こうした国際協力の仕事を始めたのですが、いつの間にか、その思いが、途上国の人を踏み台にして、自己実現を図るという醜悪な自尊心と高ぶりに変質していたことに気付かされました。創造主なる神様に目を留めることをせず、自分を神として歩んだ結果が、これでした。毎日死にたいと思っていましたが、その原因もこの罪にあることを知らされ、イエス様がその罪のために十字架にかかってくださり、そのときに私も十字架に付いて罪とともに死んだので、もう死ななくてよいことも分かりました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

新たな戦い

こうしてイエス様を救い主として受け入れ、二〇〇二年五月、御代田の福音センターで受洗しました。集会に通う中で、多くの兄弟姉妹方との交流も増えて、幸せな日々が続きました。創造主なる神様の圧倒的な威光に心打たれ、心が喜びで満ち満ちていました。いろいろな問題もありましたが、それを問題と感じませんでした。

しかし数年経つと、徐々に電池が切れるように、喜びが衰えてきました。もともと私は人付き合いがあまり得意な方ではないのですが、そのことで周囲と不要な摩擦を生じるようなことがあると、以前にも増して強い自責感、良心の呵責を覚えるようになりました。救われた後で起きる問題について、主へのゆだね方、祈り方を知らなかった私は、問題が起きるたびに混乱し、強い自責感の中で苦しむことになりました。

そんなとき、あることがきっかけで、この自責感がお酒を飲むと、嘘のように消えることに気づきました。問題が起きると、苦しみで悶絶するような感覚になるのですが、そういうときにお酒を飲むと、ほんの数十秒で苦痛が完全に消えてなくなるのです。この即効性のためにアルコールが手放せなくなりました。

平日は仕事があるので何とか自制できるのですが、金曜の晩から日曜の夕方まで、目が開いている間はずっと間断なく飲むようになりました。当然、礼拝にも行けなくなりました。聖書には、飲酒自体を禁止する表現はありませんが、「酒に酔ってはいけません」（エペソ5・18）というみことばがあります。この点、私は苦しみを消すために酩酊状態になるまで飲んでいましたので、何の言い訳もできませんでした。

また当時、私が最も深刻に受け止めていたのは、真剣に祈る機会が減ったことです。信仰者は、苦しければ普通は祈ると思いますが、私はアルコールに手が伸びました。そのため、年に一、二回は、意を決して家にある全ての酒類を台所に流すのですが、しばらくするとまた大量のストックを買い込んでしまい、自分の意

もう一人はお酒を飲まなくても平気な新しい自分です。古い自分は、まだ私の中に確かに存在しているのですが、それはすでに死んでいて、力がありません。お酒を飲みたいと思っているのですが、実際に買って飲もうとしても、身体に力が入らないのです。これは、まさに聖書のローマ人への手紙に書いてあることだと思いました。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。（ローマ　6・6〜7）

私がお酒を飲まずにいられるのは、私の力によるものではなく、イエス様の十字架によるものだということが、改めてよく分かりました。このことは、気を抜けば一瞬で元に戻ってしまうということでもあります。主を畏（おそ）れ、主に感謝して歩みたいと思っています。

志でやめることができないことを痛感していました。本当にみじめな状態でしたが、この状態は九年も続きました。しかし、あるとき転機が来ました。

二〇一七年十二月、お世話になったある兄弟が召され、その葬儀が集会でありました。このときは、なぜか自然と集会へ足が向き、葬儀に参加することができました。久しぶりに多くの兄弟姉妹にお会いし、帰宅後、なぜかお酒を完全にやめたいという思いが与えられました。しばらく祈っていたところ、二〇一八年の年明けに、ごく自然な流れでお酒をやめることができました。礼拝にも、およそ九年ぶりに出ることができました。今に至るまで、お酒を一滴も飲まずに守られていますが、私の中では不思議な変化が起きたと思っています。

それは、全然我慢していないのに、飲まないでいられるということです。私の中には二人の自分がいて、一人はお酒を飲みたくて仕方がない古いかつての自分、

父の召天

実は、アルコールをやめるきっかけとなった集会の葬儀では、数年ぶりに父とばったり出会うという出来事がありました。父とは、一九八六年に家を出てから約二十年間会うことはありませんでしたが、二〇〇五年に父も救われて受洗してから、時々会う機会がありました。

しかしそれでも、急に怒りを爆発させるようなところはまだ残っており、私たち家族も距離を置かざるを得ませんでした。そのようなわけで、集会の葬儀では久しぶりの父との再会となったわけですが、父は私に会うなり、「今後、自分が死んだ後の話、つまりお金の処理や手続の話をしておきたいので、近いうちに自宅に来てほしい」ということを言ってきました。どこか低姿勢で、以前とは少し雰囲気が変わっていました。

後日、父宅に行くと、いろいろな書類を出してきて、自分が亡くなった後のお金の処理について、淡々と申し送りをしてくれました。その後、二度ほど父宅に行くことになりましたが、そのたびに距離が縮まっていきました。

二〇一八年の大晦日（おおみそか）には、初めて特に用事を設けず、ただ様子をうかがうためだけに父宅を訪問しました。このときは、なぜか父はいつも以上に穏やかな様子で、お互いにリラックスして話をすることができました。それどころか、共に気まずい過去を掘り起こしかねない昔のアルバムを一緒に見ながら冗談を言い合うなど、少し前なら考えられないような和やかな雰囲気で会話が弾みました。非常に不思議な出来事で、イエス様が働かれ、主が父と私を和解させてくださったと感じました。

キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。…敵意は十字架によって葬り去られました。（エペソ　2・14～16）

それから約四か月後の二〇一九年四月中旬、父は何の前触れもなく、心不全で急逝しました。あまりに突然のことで何の用意もない中、多くの兄弟姉妹方に助けていただきながら、葬儀の準備を進めました。葬儀当日は、主が豊かにご栄光を現してくださいました。私たちの人生というのは、この世での人生と、その後の霊的世界での人生から成り立っています。その意味で、父もこの世から霊的な世界へ移行しただけで、今も天国で生きていることが分かりました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。…」（ヨハネ　11・25～26）

葬儀が終わり、少し落ち着いた頃、父宅に遺品の整理に行きました。まず最も大事なものとして、父の聖書を回収しました。父は私よりも三年後に救われたのですが、私の聖書よりも遥かに読み込まれた形跡があり、あちこちに赤線が引いてあったり、書き込みがしてありました。父が天国に行ったことを改めて確信しました。

また、日記やメモ書きのようなものも大量に遺されていました。父は生来、人を寄せ付けないところがあり、何か気に入らないことがあると大声を張り上げたりして、私達家族も本当に大変でしたが、遺されたメモ書きなどを読んで、自分でもどうしていいか分からないという魂の深い苦悩があったことが分かりました。

これら遺されたものを読んで、人には他の人にはどうしても理解できない深い部分がある、そのことは神様にしか分からないし、自分には分からないということを改めて思わされました。幼少期を戦乱に翻弄された多難な人生でしたが、天国に行ったことは確かで、人生の深淵さに思いを馳せました。聖書には、「あなたの父と母を敬え。」（申命記5・16）というみことばがありますが、最後の最後にこのみことばが私の中でも成就し、心の重荷が取れ、主のご栄光を拝しました。

すべてを覆うイエス様の十字架

アルコールの問題から解放されて集会に戻り、父の葬儀などを通して、最近は、以前よりも多くの兄弟姉妹と交流する機会も増えました。このことは大変うれしいことですが、自分の罪深さをよりよく知らされる機会が増えたということでもあります。

自分の罪深さを知ることは辛いことです。目の前に、真っ黒な穴が空いており、その暗闇の底が見えません。そのため、ときどきこの暗闇に押し潰されそうになりますが、そんなときにいつも知らされることは、イエス様は、この無限に広がる暗闇の罪を、私以上によくご存じであり、それを承知の上で黙って十字架にかかってくださり、この罪を完全に清算してくださったということです。

人の思いを遥かに超えた主の恵みに感謝しつつ、これからも主と一つになって、兄弟姉妹方と一つになって、前に向かって歩むことができればと思っています。また、この群れに一人でも多くの方が加わり、ともに心からの喜びを分かち合うことができればと思っています。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救い

を得ているからです。　（1ペテロ　1・8〜9）

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

（2コリント　4・16〜17）

田村 啓太（たむら けいた）
一九六六年 茨城県生まれ、明治学院大学、米国コロンビア大学修士課程卒。第一三共（株）、国連機関に勤務後、東京SIM外語研究所を経て、現在、自営業
父　旭（あきら）二〇一九年四月召天
母　禎子（ていこ）
妹　絵里（えり）



主が私に成し遂げて下さったこと

内田 好隆



奥様の雅子さんと

イエス様との出会い

私は、一九五〇年十月五日に佐賀県伊万里市で二十五歳と二〇歳の若い両親、内田直とヨシミの三男一女の長男として、誕生しました。両親の愛を受けて、いわゆる「良い子」として、伊万里市内の小中学校に通い、高校は佐賀市内の工業高校建築科に三年間自宅から汽車通学をしました。まだSLが走っていた時代のことです。高校の成績は比較的良い方でしたが、就職試験で失敗し、希望していた建築関係の会社に入れず、設備工事関係の会社に就職が内定しました。学校の勧めもあって、不本意ながらその東京の会社に就職しました。

「不本意」な気持ちを持ちながら、会社での生活が始まり、設備工事の現場担当者として働いていました。入社後三年目に一人で、デパートの増築工事を担当していた時、既設建物の増築のため、思わぬトラブルで悩まされました。上司に相談することも出来ず、自分

の内にあった自信が全て壊され、自己嫌悪に陥った私は、自殺する為に現場を逃げ出しました。しかし、自殺する勇気もなく、あちらこちらとさ迷ったあげく、結局上司のもとに帰り、その方の指示で職場に復帰しました。しかし、現場担当者としては使い物にならなくなっていた私は、営業部に転属となり、一年後、本社から福岡支店に転勤になりました。

福岡に転勤後、まずは新しい気持ちで仕事に打ち込むため、今までの生活を改善し気持ちを切り替えようと、朝のジョギングを始めました。そのジョギングコースの途中、当時の住居から近い所に一つの教会があるのに気付きました。そして、その頃その教会で開催されていた映画集会に興味を持ち、夜の映画集会に集ったのが、自らの意志で教会に足を踏み入れた最初の日でした。一九七九年二月のことです。

当時、その教会に集っておられた方（現在、福岡集会に集っている森崎いずみさんのお父さん）の勧めがあって、日曜日の集会にも毎週参加するようになりました。

それから、三か月ほど経ったころ、教会の遠足が福岡城址であり、それに参加した後、帰宅して、自室で昼寝をしていた時に、急に、教会で聞いた聖書のみことばが頭に浮かびました。

小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、
小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。
（ルカ　16・10）

私は、このみことばで自分の本性を見せられたような気がしました。小さい事に不忠実な者だったのです。私は、すぐに、「信じます」と言いました。すると喜びが心の底から湧いてきました。

雅子との出会い

その後、私は、信仰告白し教会に通う生活を続けていました。そして、日曜学校に加わり、子供たちと聖書物語を学んでいました。ある日、日曜学校で子供賛美歌を子供たちと共に歌っていた時、賛美を指導していた女性から注意を受けました。「内田さん、音が違います。まるでＪＲの鹿児島本線から筑肥線の方へ行っているようです」と。（その当時、教会のすぐ傍にＪＲの筑肥線の線路がありました。）その女性が現在の妻、雅子でした。

しばらくして、教会の方の勧めで、雅子との結婚の話が出ました。当時看護の仕事に勤しんでいた雅子にとっては、かなりの年齢差があり、ましてや、つい先日イエスさまを信じたばかりの私との結婚話など寝耳に水で全く考えてもいないことと、とまどっていたようです。しかし、彼女は、年齢差や信仰生活の長短のことで、すぐ断るようなことはしませんでした。お互い、相手のことを何も知らない者同士なので、少なくとも一年間は、直接お話をしたり、文通を通してお互いのことを知り、この結婚が神様のご計画なのかどうか祈ることにしては、と提案してきました。

そこで、そのようにして一年間過ごした後、二人共、神様のみこころと思えるようになりましたので、結婚を決断し、式を挙げることになりました。

一九八〇年五月二十五日のことです。

教会から集会へ

雅子が一九九二年六月の土曜日の福岡キリスト集会の家庭集会に、誘いを受けて、私たちは二人で初めて集会の家庭集会に参加しました。

そして、その時に聞いたメッセージと集会の雰囲気に感動した雅子は翌日の日曜礼拝も集会へ参加したいと言い、私は所属教会の礼拝へ、雅子は福岡集会の礼拝へと初めて別々の集会に参加しました。雅子は、日

曜日の福音集会で語られた重田定義さんのメッセージ「役に立たない帯」（エレミヤ書一三章一～七節）を聞いて早くも翌々週から福岡キリスト集会に移りました。

当時、私は教会から集会に移るつもりは全くなかったのですが、福岡集会の土曜日の家庭集会には毎回出席し、同年八月には東京で重田ご夫妻宅の家庭集会、翌日曜日には吉祥寺キリスト集会の礼拝に一人で参加しました。重田夫人のお誘いを受けて、八月の御代田喜びの集いには二人で参加することにしました。最初の御代田での喜びの集いの帰りがけに、私たちが教会と集会に別々に集っていることをご存知の重田夫人は「一日も早く、お二人揃って同じ場所で主イエスさまを礼拝なさることが出来ますよう祈ります！」と言ってくださいました。

それでも、まだ日曜日の礼拝は教会、土曜日の家庭集会は福岡集会と両方の集会に集っていた私が、ある時、いつの間にか教会ではなく集会へ集うようになりました。当時、私は教会の会計を担当していることもあり、年度末である翌三月まで教会にとどまろうと思っていたのですが、一九九二年十月の雅子の誕生日を機に福岡キリスト集会に移ることを決心し、彼女に告げました。

新居と家庭集会

私たちは結婚後、借家に二十年間、市営住宅に十年間住んでいました。

雅子は一九九五年十月から、脳梗塞で倒れた母親のために、姉と二人で交替しながら福岡から島根県浜田市までの遠距離介護を続けていました。その母親が、二〇〇八年十二月九日に九十六歳で天に召されたとき、雅子のために必要なお金を残してくれました。

そんな時、マンションの売り出しを見つけたので、二人でモデルルームを見学に行きましたが、予約がないとモデルルームの見学は出来ないと受付で言われました。見学が予約制になっていると知らなかった私たちがそのまま帰ろうとしていたところ、奥の部屋から販売責任者の方が出てきて「せっかくですから、見るだけでも、見て行って下さい」と言われたので、A、B、C、Dと四つのタイプの家のプランを見ることができました。

四つのうちのCタイプは東南の方角に四室が一列に並び、全部洋室でどの部屋も明るく奥行の広いベランダが横に一列に二軒分の長さで作られていました。私たちは、これが一目で気に入りました。3LDKの部屋のうちリビングの隣りの部屋の壁を取り払ってワンルームにすると、オープンキッチンになっているダイニングキッチンを合わせて二〇帖位にはなるので、家庭集会が開けるのではないかという思いがサーと浮かんで来ました。そして、オプションで装備された作り付けのカウンターや吊戸棚も雅子はとても気に入り、その場でほとんどモデルルームの装備のままオプションをつけて間取りを3LDKから2LDKに変更してCタイプの部屋の購入を決め、販売責任者の方と購入の打合せに入りました。私たちの購入可能な予算額を聞かれた販売責任者の方は、即座に「今売り出されている家の中では、これです」と七〇三号室を示されました。それは、一九階建のタワーマンションの七階の一部屋でした。私たちはその示された部屋番号「七〇三」を見て、即座に「ナオミ」と読み、これはイエスさまからだと確信しました。

このモデルルームを見学したのが二〇〇八年十二月二三日で、正式に契約したのは翌日、二十四日でした。その日は、販売会社が年末年始の休みに入った日でしたが、責任者の方が一人で待っていてくれました。まさに滑り込みの契約で、私たちにとっては、イエス様からの大きな、大きなクリスマスプレゼントでした。

この家に入居したのは、それから一年三か月後の二〇一〇年三月二十六日で、今年(二〇二一年)は入居後十一年目になります。そして、この二部屋を一つにした場所は、イエス様が家庭集会のために用いて下さり、今回は、リモートを使って開催された福岡喜びの集いのホスト宅となりました。ただただ主の成して下さった大いなる御業をほめ讃え、感謝と賛美を捧げるのみです。

今日(二〇二〇年九月八日)は超大型台風と予測されていた台風一〇号が福岡市内にはあまり被害を残さず過ぎ去り、暖かい日差しが部屋に注いでいます。

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。

(詩篇　138・8)

内田 好隆(うちだ よしたか)
一九五〇年十月五日佐賀県伊万里市生まれ、佐賀県立佐賀工業高校卒業、現在 株式会社曙設備工業所 嘱託

妻　雅子(まさこ)

私の時は御手の中にあります

内田 雅子



ご主人の好隆さんと(1992年8月、御代田の福音センター献堂式にて)

私は十九歳の時に、イエスさまに救い出していただいてから六十年になります。そのため、今日に至るまで、主イエスさまが多くの人々を通して私を導き続けてくださっているその恵みの大きさ深さを表現し尽くすことは到底出来そうにありませんので、どうしてもこのことだけは、ということに焦点を当てて記してみたいと思います。

私の家族のこと

私は一九四二年十月十三日に、旧満州の天津で満鉄職員であった父、半場清九郎、母、満洲枝の四女(一男四女の末っ子)として生まれました。母が私を出産後体調不良だったことから、母と子どもたちは父の実家のある島根県浜田市に帰りました。そして乳飲み子であった私だけが、同市内の縁戚関係のない子供のいない夫妻のもとに預けられ、そこで小学校入学前まで実の姉や兄たちとは別に育てられました。母は私を出産

してから半年後に、三十一歳で病死しました。そのため私は母のことは全く覚えておらず、親戚の伯父からもらった一枚の写真を見ながら、姉から聞いた母のことをあれこれと想像し、思い巡らしたりしたものでした。小学校入学前に自分の家に帰って来た私は、血縁者である家族とすんなりとは馴染めず、まるで他人の家に来ているような感じで過ごしていたように思います。父方の祖父母は私の出生前に亡くなっておりましたが、祖母が始めた旅館業を、一人息子である父が継ぐことになり、父には〇歳から八歳までの子供たち四人（一人は生後間もなく死亡）の養育と家業が残されました。後に父は生母と同年代の人と再婚しました。私はこの継母に小学校入学時から高校卒業するまで、さらに、後に進んだ看護学校三年間も学費を援助してもらいました。

私が小学生の頃から人間の死や生命について考え始めたのは、私の生まれ育った環境の中で、家族や私に関わってくれた人々の死に次々と出会ったことに原因があったのかもしれません。最初は生母が私を出産後、三十一歳で病死。小学校二年の時、五人兄弟の一番上の姉が十七歳で自死。中学二年の時、父が五十四歳で病死。同じ頃に、私を乳児期から就学前まで育ててくれた養父母の死。そして私が十九歳の時に、三歳年上の兄が二十二歳で病死と、次々と肉親や養育してくれた人々の死に出会い、私が十九歳の時には血縁者は六歳年上の姉一人となりました。この姉が、私がイエスさまと出会うきっかけをつくってくれた人です。姉は、後に八十四歳で脳梗塞で倒れた継母のために交替しながら、福岡から継母の住む島根県浜田市までの遠距離介護を十三年間続けた同志でもあります。現在に至るまでの私の生活は、この姉の助けに負うものが多く、八十五歳になる姉は今も同じ福岡市内で自立した一人暮らしをしております。

映画「ベン・ハー」を通しての聖書との出会い

高校三年の夏休みに、当時九州大学病院で看護職に就いていた姉のもとに遊びに行った時、福岡市内の映画館に連れて行ってもらい、初めてシネマスコープという大画面大音響で、映画「ベン・ハー」を観ました。記憶に残っている名場面は数々ありますが、その中のワンシーンは、約六十年近くも前に観たのに、まるで昨日観たかのように鮮明に覚えており、聖書を求めて読むきっかけとなったものでした。そのシーンとは、主人公のベン・ハーが奴隷と成り果て、ガレー船で漕がされた後、上陸し、重い鎖の手かせ足かせを引きずりながら熱い砂浜を歩いて行く途中のことでした。彼は番兵たちに邪魔されて水が飲めず、倒れ込んだ時、一人の人がひしゃくで水を差し出し、彼に与えました。水を与える人の顔は映されず、白い衣を着た後ろ姿が映し出されていただけでしたが、それを受け取る彼は跪き、感謝に満ちた眼差しでその人を見上げる表情がとても印象的でした。チャールトン・ヘストンの名演技によるものかもしれませんが、今でも思い出すと涙が出そうなくらいです。この後、すぐに聖書を求めました。何故その時、この映画と聖書と結び付けたのか今でもわかりませんし、この映画の原作者が、聖書（直接的にはイエス・キリストかもしれませんが）を否定しようとして書き始めたところ、書き終わったら逆にキリスト者になっていたという話もその頃はまったく知りませんでした。しかし私にとってはこの映画との出会いが聖書との出会いとなりました。ただしその頃は、聖書を求めたからといって聖書を通読するとか、教会に通うこともなく、何事か悩みがあった時、詩篇や箴言、伝道者の書などを読んでいる程度でした。

浜田から福岡へ

高校三年の秋になってもなかなか進路を決めることが出来ず、鬱々とした状態で過ごしていました。私

は大学進学よりも専門の技術を身につけるため、一年間家事手伝いをしながら受験勉強をして、専門学校を受験したほうがよいのではと迷っていました。その頃、大阪での仕事を辞めて帰省していた兄が私のことを心配して姉に相談し、受験までの期間、私を姉宅へ寄宿させてくれるように頼んでくれ、約一年間、姉の所でお世話になることになりました。当時九州大学病院に勤務していた姉は、私のために、軽いアルバイトをしながら受験勉強した方がよいのではと考え、ちょうどその時に医学部内の掲示板に載っていた解剖学教室の研究補助員募集の求人広告を見て、面接を受けてみてはと勧めてくれました。さっそく姉に付き添われて面接を受けに行きました。「解剖学教室」という名前を聞いただけで、いったいどんな仕事をするのだろうという不安な気持ちもありましたが、その教室の教授と秘書の方に会った時に不安な気持ちは消えました。その当時、医学部内には解剖学教室は三つあり、求人募集していたのは電子顕微鏡を使っての研究室で、そこの教授は山田英知先生というほんとうに名前の通りのスマートで柔和な感じで英国紳士風の素敵な方でした。面接時の質問として心に残っているのは「あなたは手先が器用ですか?」という質問でしたが、面と向かって尋ねられると、「はい」とも答えられず、「器用か否かわかりませんが、手先を動かす手芸や編み物は好きです」と答えた覚えがあります。仕事の内容を尋ねると、電顕用の標本を作る仕事だと言われ、よくわからないまま面接は終わりました。数日後、姉を通して採用通知をもらい、五月から十二月までの短期間ではありましたが、私にとってはとても楽しい生活が始まりました。

解剖学教室から大坪町キリスト集会へ

そんなある日、教授からの用事で隣りの解剖学研究室に行った時、一人の穏やかな表情の女性の研究補助員に会いました。その方は私が働き始めた多くの医学部の大学院生や研修医の出入りする賑(にぎ)やかな電顕室と違い、たった一人でかなり広い部屋の大きな机の前に座っておられました。その大きな机の上に立てて置いてあった『聖書』と『聖歌』の二冊の本が目に飛び込んできました。その方がキリスト者であることは電顕室の教授秘書の方から聞いていたので、「なるほどそうか」とすぐ納得したものの、しかし何故『讃美歌』ではなく『聖歌』なのだろうと思い、その言葉の違いを尋ねると、静かに微笑(ほほえ)みながら、どちらも神様を賛美する歌集であることと、歌詞の訳の違いと選曲も少し異なっていることを教えてくださいました。そして話しているうちに、私が聖書に興味を持っている様子を知り、私が話し終えると静かに「今晩七時半からすぐ近くの東公園の中の小さな幼稚園で聖書研究会がありますので、もしよかったらいらっしゃいませんか?」と、穏やかな物腰で誘ってくださいました。好奇心の強い私は、姉の許可を得てその方に連れて行ってもらいました。そこには九州大学医学部の学生、看護学生、検査技師学校の学生、キリスト集会所のある六本松方面から集っている方々と、ドイツの集会から遣わされたドイツ人宣教師のルスコーさんという方が集まっておられました。その夜の集会で初めて聞いたメッセージの内容は覚えていませんが、初めて出会った聖歌四二九番「九十九匹の羊は」は忘れることが出来ません。当時十九歳だった私は、聖書は持っていたものの、ルカの福音書十五章四節から六節のイエスさまのたとえ話は全然知らず、聖歌の歌詞を目で追ってゆくだけで何故か涙があふれ、歌いたいのに声が出なかったその夜の集会のことを、今もこの聖歌を聞くたびに思い出します。

あなた方のうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないで

しょうか。見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。（ルカ　15・4〜6）

その後も毎週水曜日夜の集会に参加しつつ、誘われるままに「大坪町キリスト集会」の日曜日の集会にも集うようになりました。そこで私が初めて参加した集会は日曜学校の小学校上級クラスで、小さな部屋に小学四年生から六年生までの子供たち数名に大学生の兄弟が、ダニエル書三章から、偶像礼拝を拒否したシャデラク、メシャク、アベデネゴの三人の信仰者の受難と信仰告白「もしそうでなくても」（ダニエル3・18）の箇所を、まるで三人の信仰者の一人でもあるかのように子供たちに熱心に語っていました。その大学生の輝いた顔は、あれから五十九年経った今でも心に焼き付いており、その時の学びは、私が主に従う決心をしたでであったので「なるほど」と思いながらそのまま詩篇を読み進んでいくと、詩篇108・1のみことばが目に飛び込んできて、びっくりしました。なんとそこには、今、私が決心した心の状態が書かれてあったからです。この時使っていた聖書は口語訳で「神よ、わが心は定まりました。わが心は定まりました。わたしは歌い、かつほめたたえます。わが魂よ、さめよ」でした。翌日、この夜の出来事を集会の終わった後、集われていた方々に話すと、共に喜んで、祈ってくださいました。

イエスさまの十字架と私の関係

姉は、受験勉強より聖書研究の方にのめり込んでいく私に「聖書研究は目標の学校に入学してからにしては？」と忠告してくれ、私もほんとうにそうすべきとわかっていましたが、その時の私は集会に集うことをやめて受験勉強に専念することが出来ませんでした。

そして八か月間働かせてもらい、私にとってはとても後、何度も試みられた偶像礼拝の罪から私を守ってくれました。

日曜の集会は日曜学校、聖餐式、福音集会と続き、聖餐式の時には一つのパンと一つのグラスに入ったぶどう酒が信仰者の間をまわり、賛美はドイツ語の聖歌グラウベンスリーダーとガイストリッヒリーダーから数十曲を大学生の方が翻訳した『礼拝讃美歌』を使い、福音集会のときには『聖歌』を使っていました。福音集会のメッセージは、ルスコーさんと他の兄弟方が交替で取り継いでおられました。集会に集われていた女性方はベールをつけ、集会室のテーブルや椅子の配置も、現在集っているキリスト集会とまったく同じで、約二十八年前に福岡キリスト集会に移って来た時には、懐かしいふるさとに帰ってきたような感じでした。このようにして、主イエスさまは私をアルバイト先の解剖学教室で出会った一キリスト者の姉妹を通して、主が建てられた大坪町キリスト集会所へと導いてくださいました。

集会に集い始めて一、二か月経った頃、福音伝道のために空き地にテントを張っての天幕集会が一週間の予定で、毎晩午後七時半から九時まで行われ、私はそこにも通い続けました。毎晩集会の終わりにかけられる呼びかけ「共に祈りたいと思う人は残ってください」に応える人のいないまま、七日間の予定が十日間に延ばされ、その九日目に語られたメッセージの中で、十二年間長血を患っている女が、イエスさまの衣にさわれば病がきっと直ると信じてイエスさまの御衣にさわった箇所（マルコ5・25〜28）の話がありました。

この話を聴いた後、聖書のことはまだまだよくわからないけれど、イエスさまに従いたいと思っていることを告げて共に祈ってもらおうと思いました。そしてその夜の集会で歌った聖歌四七二番「人生の海の嵐に」の歌詞の出典箇所を帰宅後に調べたら、詩篇107・30

も楽しく恵まれた職場であった解剖学教室での仕事を十二月末でやめ、いよいよ本気で受験勉強をしなければと思っていた時、ルスコーさんから受洗の勧めがありました。私としてはもっと聖書のことを良く知り、輝いた顔をしているみなさんが持っているという「救いの確信」とかを、私も持てた時に「受洗」をと考えているとお話ししました。するとルスコーさんは、知識による理解よりもイエス・キリストに従いたいと思っているなら、そのことを他の人々にも表明する意味での受洗なのだと教えてくださいました。

それで受洗することを決心し、このことを姉と母には知らせておくべきと考え、母にその時の気持を手紙で知らせました。

長い手紙になりましたが、書き終えてそれを読み直してみた時、私はびっくりしました。その手紙は、私の罪の赦(ゆる)しのために、罪のない神の御子イエス・キリストの十字架上の死がどうしても必要だったこと、そして本来は罪人である私自身が十字架につけられて流すべき血であったのに、イエス・キリストが私の身代わりになって十字架上で血を流してくださった、このことを信じることによって神の前に私の罪は赦され、これが「救い」ということなのだ、だから私は、私のために十字架上で血を流し、いのちを捨ててまで私を愛してくださったイエスさまに従ってゆきたいと決心し、その証しとして受洗を決意したことを一気に書き連ねていました。

私は自分の書いた母宛の手紙を読み直して、今まではっきりわからなかったことが、一気にすう～と明確にわかると同時に、イエスさまによって救われたことに対する喜びと感謝で涙があふれて止まりませんでした。そして、「どうして私はこんな文章が書けたのだろう、私自身がわからなかったことを母に伝えるなんて」と思いましたが、これこそ「聖霊」に導かれて書くことができたのだと後でわかりました。その当時私は三位一体の父なる神、御子なる神までは頭ですぐ理解できていましたが、「聖霊なる神」だけはわからず「聖霊」という言葉が出てくる聖歌はあまり好きではありませんでした。しかし、この「聖霊」こそ、実際に信仰者を導いてくださる神であることが体験によってわかるようになりました。私にとっては本当に不思議な体験で、これ以後今に至るまで、イエスさまに従って歩むことに迷いや恐れはまったくなくなり、救われたことの喜びと感謝に満たされました。そして一九六二年二月三日に受洗しました。

主が備えてくださった新たな道

姉の忠告にもかかわらず、受験勉強よりも聖書研究の方を優先した私は、当然の結果として二月にあった九州大学医学部付属看護学校と検査技師学校の入学試験は両方とも不合格でした。福岡に出て来た本来の目的を達成することが出来なかった私は、三月以降、福岡にとどまることは出来ない。しかし実家のある浜田市に帰ると、今与えられている集会での交わりや聖書の学びが続けられなくなる。浜田には、あの大きな緑色の門のカトリック教会しかない、とてもあそこに入っていくことはできない。ああ、どうしても福岡にとどまり、この大坪町キリスト集会に集い続けたいと、切に心の中で願いました。すると次の日曜日の集会に行った時、一人の兄弟が「半場さん(旧姓)仕事はきっと見つかりますよ」と笑顔で言ってくださいました。私は、この時の兄弟の優しい笑顔と言葉がとてもうれしく、「私の心の願いの応(こた)えだろうか」と思って静かに待つことにしました。

その後、学生伝道や文書伝道を伝道目標の一つにしておられたルスコーさんから、エマオ聖書通信講座の仕事や九州伝道出版社の出版物の校正や発送の仕事を次々と与えられ、数年後には小さな書店「聖書館」の管理の仕事をも与えられました。本が大好きな私にとっ

ては、信仰書に囲まれての毎日は、とてもうれしく感謝な日々でした。しかし二、三年経った頃、それまで、ルスコーさん宅の家事を手伝っておられた方が退職され、その後の方も長く続いて働く人がいなくなったため、私が午前中はルスコーさん宅の家事を手伝い、午後から聖書館での仕事をするということになりました。しかし書店を半日しか開けないということを続ける訳にもいかない為、その後、書店の仕事は他の方に託して私はルスコーさん宅の家事手伝いに専念することになりました。

ルスコーご一家と共に過ごした期間は、最初の出会いから数えると約八年近くになりましたが、今から思えばそれは神様が与えてくださった私のための家政学の学びの場所であり、豊かな恵みの時であったように思います。毎年夏には、日本全国から宣教師とその家族の方々が集まり交流を深めている軽井沢に、私もルスコーさん一家と共に数回行ったことがあります。そして、ユニオンチャーチで日曜日の午後に開かれた日本人のキリスト者のための集会に参加する恵みにもあずかりました。ルスコーさんの別荘の隣りは　ドイツ人宣教師のステッカーさんのお宅で、広い敷地はキャンプ場になっていました。ベックさんご夫妻の別荘は、通りに面していたルスコーさん宅よりずっと奥まった所にあり、日曜日の午後は家族そろって散歩しておられた光景を良く覚えています。また、ブランチ(食事会)にも招かれ、ミンヘンさん手作りのたくさんのケーキやクッキー、その他豊かな食物や飲み物は、「朝からこんなにもたくさん」と驚きと感謝でした。

ルスコーさん一家と共に過ごした恵みの時も、子供たちの教育の問題でご一家が渡米されることで終わりの時がきました。

看護職への道程

先々どういう状況になろうとも自立して生きてゆける職業を身につけておかねばならない、と考えていた私が選んだ職業は、やはり看護職でした。

そこで専門学校の案内書をめくっていた時、私の目にパッと飛び込んできたのは「日本バプテスト看護学院」の文字でした。それを見て驚いたのは、看護学校にもミッション系の学校があることでした。その学校の受験資格の年齢が十八歳から三十歳までと記してあるのを見て、当時二十七歳だった私でも受験出来ると思って胸がドキドキしたのを覚えています。そしてもう一度驚くと同時に失望したのは、募集人員が十五名と記してあったことです。他の学校はだいたい四十から五十名でしたので、その三分の一ではとても無理だと思いながら、さらに他の学校の募集要項を調べましたが、当時二十七歳だった私が受験出来るのは日本全国でただ一校、日本バプテスト看護学院だけでした。高校卒業後八年のブランクのある私にとって、受験科目が五教科五科目あり募集人員が十五名とあってはこの学校の入試を受けるには一年間準備してもとても無理だろうと思う一方、何故かこの学校で学びたいという思いは強くなるばかりでした。

そこで私は祈りつつ、信仰の歩みを共にしていた親しい姉妹二人に自分の思いを打ち明けてみることにしました。渡米されるルスコーさん一家を見送った後、実家に帰ってまた受験勉強し直して、再来年日本バプテスト看護学院の受験をしてみて、それで駄目だったら准看護(じゅんかんご)コースで働きながら資格を取得するつもりだと話しました。私の思いを知った二人の姉妹たちは共に喜んで祈りつつ、私のまったく知らないところで働いて私を支えてくれました。そしてこの二人は市内のバプテスト教会の友人姉妹に、私のことを話してくれたようです。

ちょうどその頃、そのバプテスト教会の別の方が京都バプテスト病院の事務職につくための面接に、牧師と共に京都まで行かれることになっていたそうで、二

人から私のことを聞いていた姉妹が、その牧師に私のことを伝えてくれたのです。するとその盲目の牧師は、一教会員の姉妹から耳にしただけで一度も会ったことのない他教会の会員である私のことを、面接の付き添いのときに看護部長に直接会って伝えてくださったのです。そして私の受験志望のことを牧師から聞かれた看護部長は、入試要項その他の入試に必要なパンフレット一式と、事情がわかっているので受験申込期日が過ぎても準備できた書類から順次送付するように、そして必ず今回受験に来るように、との私への伝言をも牧師にことづけてくださいました。ご自分の教会員の就職のために付き添ってバプテスト病院に行かれた牧師は、他教会の会員である面識のまったくない私のために入試に必要な書類と、看護部長から私への伝言を携えて帰福されました。

そしてこの伝言と書類は即時に牧師から姉妹たちへと伝え渡され、私の元に入試要項他受験に必要な書類が届きました。この間のことは、私が同じ教会の二人の親しい姉妹たちに私の思いを話してからごく短期間の間に、私のまったく知らない所で知らない人々の間で運ばれました。私は自分自身に関する出来事の進展の速さに非常に驚きながら、受験校は決まっていても受験する時期は一年後としか考えられないことを姉妹たちに伝えると、二人は揃って「神さまのご計画であれば必ず道が開かれるはずだから、今一歩踏み出して進んだ方が良い」とすぐに受験することを強く勧めてくれました。

バプテスト看護学院の募集要項の中で他校に無い受験資格の条件は、受験申込時にキリスト者であること、それを証明するための所属教会の牧師の推薦状が必要なこと。ほかにも受験者がその学校での学びを希望する理由を書いた作文や胸部の直接撮影のレントゲン写真などを用意する必要がありました。本来ならばこれらのものを受験申込書と共に送付して初めて受験票が送られてくるのですが、私の場合、申込締切日までには到底間に合わないことがわかっていたため、準備できたものから送付するようにとのことでした。

私がバプテスト看護学院の受験を考え始めた頃、読んでいた聖書の箇所で引っかかるところがありました。それは人の考えでは到底あり得ないことを神さまがアブラハムに約束されたことです。「主にとって不可能なことがありましょうか。来年の春、定めの時に、わたしはあなたの所に帰ってきます。そのときサラには男の子が生まれているでしょう」（創世記18・14口語訳）と、心の中で笑ったサラに対して「主にとって不可能なことがありましょうか」と主の御使いがアブラハムに言われたみことばです。その時の私にとっての「イサクの誕生」は「バプテスト看護学院に入学すること」でしたが、時期としては「再来年の春」のつもりでしたから、数か月先の「来年の春」ではなかったので、この時期の約束だけはその時の私には当てはまらないと思いつつこの箇所だけが気になっていました。

不可能を可能にされる全能の神様を信じ切ることの出来ない不信仰な私に、神様は私の知らないところで私の会ったこともない方々を用いて、私のために進むべき道筋を整え「これが道だ。今この道に進め」と私を押し出してくださいました。そして看護学院受験のことをルスコー夫妻に伝えましたら、お二人とも心から喜んでくださり、すぐに推薦状を書いてくださったので、受験に必要な書類を次々に看護学院に送付しました。するとすぐに受験票が届きました。

翌年一月半ば頃、ルスコー夫妻宅の仕事をやめて島根県の実家に帰り、約一週間、高校時代の教科書と受験用の問題集をパラパラめくりながら、理数系に弱い私は数学を初めからあきらめ、選択科目は一般社会と生物を選び、生物は何故か葉緑素に関する問題だけ一夜漬けで頭に叩き込み、一般社会はざ～っと教科書を拾い読みする程度の時間しかありませんでした。とに

かく一週間で一日一科目ずつ教科書と問題集に目を通すだけという、いくら時間がないとはいえ、乱暴極まりない準備の仕方で、こんな私が受験していいのだろうかと思いつつ試験に臨みました。そしてこんなことで合格でもしたらそれこそ百%神さまがなさった奇跡でしかなく、そんなことは決して起こらないだろうと心の中で思い、不可能を可能にされる神さまを信じ切ることの出来ない不信仰な私でした。

私が受験した年の試験は筆記試験の他に面接試験と作業試験というものがありました。作業試験というのは今でいう適性検査のようなものだと思うのですが、他校の入試では見られない試験ではないかと思っています。しかし私にとっては、この試験が一番楽しく面白くやれた忘れられない試験でした。それは広い部屋に三、四台の大きなテーブルがあり、その上に衣類、台所用品、雑貨、大工道具等、色々なものがたくさん乱雑に置いてあり、受験生は一人ずつ一台のテーブルの前に立ち、そのテーブルに置いてある紙片に書いてある目的のために必要な物を選んで用意されている大きなトランクに詰めよ、という試験でした。そして自分ではこれで良し、と思ったら退室するようにというものでした。各テーブルに置いてある品々も、各自に与えられた問題の目的も違うもので試験官は受験生一人一人の動きと、目的に合った物を選び取り、いかにそれらの物をきちんと素早くトランクの中に収めるかを見て点数をつける試験だったように思います。五十年経ってもその時の光景を忘れることが出来ず、受験生として唯一楽しくやれた試験でした。

他の二つの試験では、筆記試験は予想通りの出来で、国語、英語一般社会は少しだけ、数学は白紙回答で0点、生物は一夜漬けの葉緑素（ようりょくそ）の問題がそのまま出てそれ一問だけしか出来ず、これではいくら何でも無理と思いました。さらに面接試験では自分の愚かさを露呈（ろてい）するような返答をしたりで、もう穴を掘ってでも入りたい気分で、どう考えてもこれでは入学は無理だと思い、うちしおれて見晴らしの良い高台にある看護学院の坂道を、もう一度来ることはないだろうと思いながら下って帰りました。試験の始まる前に、寮から素敵なユニホーム姿で出ていく看護学生たちを見て、ああ、私もあの素敵なユニホームを着て病棟実習に出てゆきたいと切望しましたが、試験の出来は当然のことながら無残なものでした。

京都からうちしおれて帰宅した私を見て、きっと不合格になるのは当たり前と思っていたのでしょう、母は何も言いませんでした。しかし、それから一週間もしないうちに届いた合格通知を見て私はひっくり返るほど驚きました。母はただ一言「神さまはおられるのだね～」と私に与えられた合格通知を見て言いました。そして、そのことを大いに喜びその後の三年間の私の学生生活を援助してくれました。

合格通知を受け取った時、驚愕（きょうがく）しながらも昨秋与えられたみことば、神さまがアブラハムに「主にとって不可能なことがありましょうか。来年の春、定めの時に、わたしはあなたの所に帰ってきます。そのときサラには男の子が生まれているでしょう」（創世記18・14口語訳）がよみがえり、神さまの約束が私の上に成就した。約束の時は来年の春ではなく再来年の春と勝手に思っていた不信仰な私の上にと思い、イエスさまの前にひれ伏さざるを得ませんでした。

しかし、合格通知を受け取った時の強い驚愕とその後にきた深い喜びと感謝は、しばらくすると不安と恐怖に変わり始めました。念願の看護学院に自分が計画していたより一年も早く入学できるなんてどう表現してよいかわからないほどうれしい。けれど、高校卒業後八年もブランクのある私がこれから三年間の授業についていけるだろうか、と思うと表現しがたい不安と恐怖にかられ、入学日が近づくにつれてそれは強く深くなっていき、大変なことになった、京都に行くのが

怖いと思いました。

けれども、私のために祈り、背後で実際的な働きをし続けてくれた教会の兄弟姉妹は皆、心から喜び、奇跡を成してくださった主イエスさまを共にほめたたえ、母や姉も喜んで私を送り出してくれました。

不可能を可能にしてくださるイエスさまの導きに従って京都に出て行き、念願の「日本バプテスト看護学院」の五回生として私よりも若い同級生や上級生たちと三年間の学びをさせていただけたことは、どんなに感謝してもし尽くせません。

再び福岡へ

三十歳になって看護学院卒業後、すぐに帰福し福岡市内の病院に就職、やっと自立することが出来ました。そして入学前から在学中もずっと祈りで支え続けてくれた大坪キリスト集会(旧称)に集っていましたが、その後一九九二年に福岡キリスト集会に移ることになり、現在に至ります。

集会に移ってからもう二十八年にもなりますが時々色々なことに出会い、あれこれ考えて思い悩む時に、ベックさんの一言、「マサコ、あなたはイエスさまだけでは不足なの～?」という声がいつもよみがえってきます。そうでした! すべてはイエスさまの御手の中で起こされている。だから私は、イエスさまが自分に与えてくださっていることを、導いてくださっているこの所で忠実に果たしていくだけでよいのだという思いに立ち返ることが出来るのも、次のベックさんの言葉によるところが大きいのです。

「イエスさまに似た者とされるまで　あなたも主がお与えになったわざを続けるのです。主への忠実こそがすべてです。主がお気に召してくださること、大切なのはそれだけです。人間的にいくら勤勉であったとしても、永遠の実を結ぶことはありません。」(G・ベック)

「主がわたしの手をとってくださいます　どうしてこわがったり　にげたりするでしょう　やさしい主の手にすべてをまかせて　たびができるとは　なんたるめぐみでしょう

いつまであるくか　どこまでいくのか　主がそのみむねを　なしたもうままです　やさしい主の手にすべてをまかせて　たびができるとは　なんたるめぐみでしょう」(聖歌651番より)

主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。私は救いの杯(さかずき)をかかげ、主の御名を呼び求めよう。　(詩篇　116・12～13)

内田 雅子(うちだ まさこ)

一九四二年十月十三日　旧満州、天津生まれ、日本バプテスト看護学院卒業、現在　主婦

夫　好隆(よしたか)

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

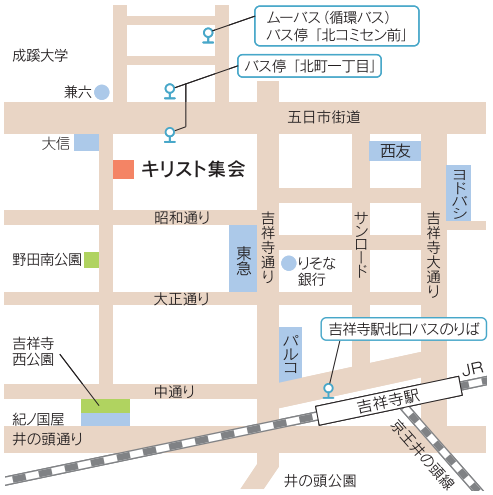
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

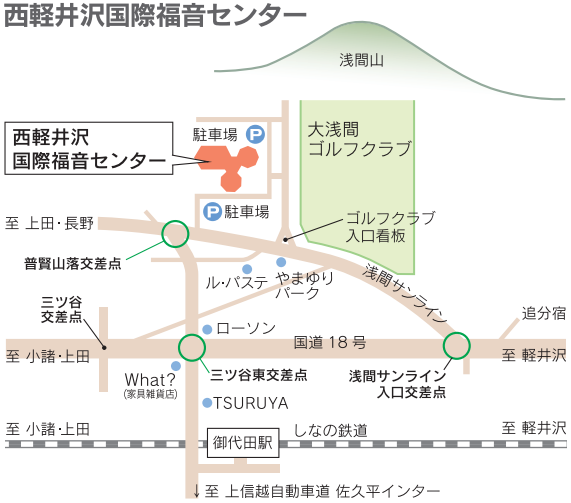
［電話］0422-21-8450（集会所）
東京都 武蔵野市 吉祥寺本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会	10:30 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



西軽井沢国際福音センター



アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分（1000 円程度）
徒歩 約45分＝３Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】
上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分（約7km）

■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

西軽井沢国際福音センター
［電話］ 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
［電話］ 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第56号

定価100円（税込み）2021年4月1日発行

編集スタッフ	岩本秀造　黒澤錬二　鈴木力
	芳我幸雄　福留伸子　牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守恪太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ　http://christ-shukai.net/
出版本を購入されたい方、お問い合わせ　webmaster@christ-shukai.net
また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。